

忠烈歌集

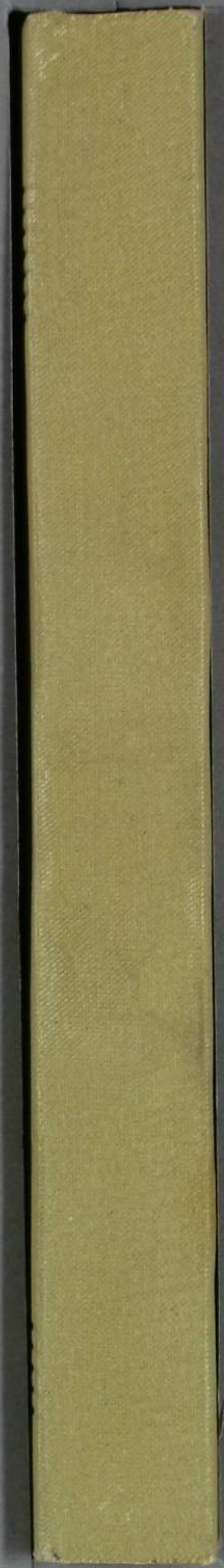
5

10

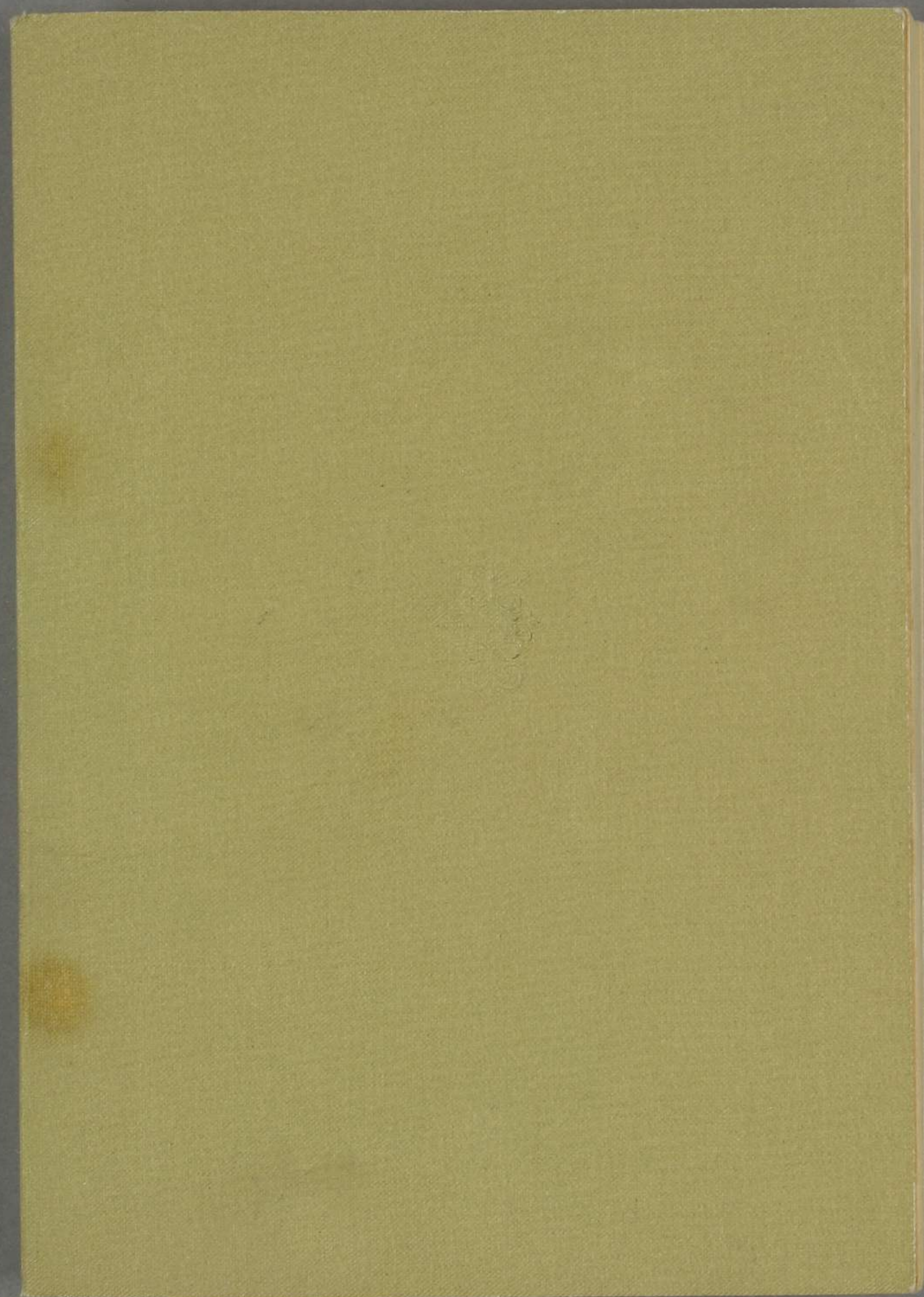
15

20



















一忠烈歌集 六冊

右陸海軍人へ寄贈ノ趣旨ヲ以テ編纂

ニ付

聖上

皇后兩陛下

東宮同妃兩殿下

常宮

周宮兩殿下へ獻納被致候ニ付

御前へ差上候此段申入候也

明治三十七年十一月十五日

宮内大臣子爵 田中光顯

大日本歌道獎勵會

會長侯爵 鍋島直大殿



忠烈





忠



烈



明治甲辰夏日

田中光顯題



忠烈歌集の

はしめに

高崎 正風

大御代にあひていよく

かゝやきぬ神代なからの

やまとたましひ



忠烈歌集の成れるを

よろこひて

鍋嶋 直大

とりくくにほふ言葉の

花はみなやまとこゝろに

ねさしてそさく



忠烈歌集序

すめらみことにつかへまつるは、おみとあり  
たみとあるものゝ、すべてのつとめなり。そが  
なかに、みいくさびとたちは、とほくもろこし  
のうみやまにむかひ、みくに、あたするくな  
たぶれらを、うちきためはらひしりぞけんと、  
いみじきあつさはげしきさむさはさらなり、  
うゑもつかれもたへしのび、いにしへにため  
しもきかず、のちのよにまたとあるまじくお



ほゆるばかりの、たゝかひせられしとたびか  
さなりぬ。われら、みくにゝのこりゐて、のどか  
におきふしする、おもへばうらはつかしく、こ  
ころぐるしくなむ。なにごとにもあれ、およば  
むかぎりのちからをもて、くがとうみとのみ  
いくさびとたちをなぐさめばやと、わが歌道  
奨励會にては、かくあまたの歌をあつめえら  
びすりまきとし、これをおくることとせり。こ  
ゝに、かしこくかたじけなきは、高輪のとのに

おはします、常宮 周宮ふたところのひめ  
みこをはじめ奉り、かたよゝのみやす所たち  
の、みうたをくだしたまへることなり。こを拜  
み見る人々のよるこび、いかにふかくらん。こ  
の會のめいほくも、またいみじきわざなりけ  
り。千秋をぢなきも、顧問におされて、何くれと  
この會の事にかくつらへば、かくるうたぶみ  
のなりをへたるをうれしみ、ひとことのはし  
がきをものしつ。あはれこのふみ、幸にあまた



のみいくさ人たちをなぐさめて、のちくま  
でものこれらば、たぐひまれなる明治の大御  
代の、みいつのひかりをつたふるくさはひと  
もなりなむかし

三十七年のあきのなかば

わたなへの千秋

### 宣戦の詔勅

天佑を保有し萬世一系の皇祚を踐める大日本國皇帝は忠  
實勇武なる汝有衆に示す  
朕茲に露國に對して戦を宣す朕が陸海軍は宜く全力を極  
めて露國と交戦の事に従ふべく朕が百僚有司は宜く各々  
其職務に率ひ其の權能に應じて國家の目的を達するに努  
力すへし凡そ國際條規の範圍に於て一切の手段を盡し遺  
算なからむことを期せよ  
惟ふに文明を平和に求め列國と友誼を篤くして以て東洋  
の治安を永遠に維持し各國の權利利益を損傷せずして永  
く帝國の安全を將來に保障すへき事態を確立するは朕夙



に以て國交の要義と爲し且暮敢て違はさらむことを期す  
朕か有司も亦能く朕か意を體して事に従ひ列國との關係  
年を逐ふて益々親厚に赴くを見る今不幸にして露國と釁  
端を開くに至る豈朕か志ならむや

帝國の重を韓國の保全に置くや一日の故に非ず是れ兩國  
累世の關係に因るのみならず韓國の存亡は實に帝國安危  
の繋る所なればなり然るに露國は其の清國との明約及列  
國に對する累次の宣言に拘はらず依然滿州に占據し益々  
其の地歩を鞏固にして終に之を併呑せむとす若し滿州に  
して露國の領有に歸せん乎韓國の保全は支持するに由な  
く極東の平和亦素より望むへからず故に朕は此の機に際  
し切に妥協に由て時局を解決し以て平和を恒久に維持せ

むことを期し有司をして露國に提議し半歳の久しきに互  
りて屢次折衝を重ねしめたるも露國は一も交讓の精神を  
以て之を迎へず曠日彌久徒に時局の解決を遷延せしめ陽  
に平和を唱道し陰に海陸の軍備を増大し以て我を屈從せ  
しめむとす凡そ露國か始より平和を好愛するの誠意なる  
もの毫も認むるに由なし露國は既に帝國の提議を容れず  
韓國の安全は方に危急に瀕し帝國の國利は將に侵迫せら  
れむとす事既に茲に至る帝國か平和の交渉に依り求めむ  
としたり將來の保障は今日之を旗鼓の間に求むるの外な  
し朕は汝有衆の忠實勇武なるに倚賴し速に平和を永遠に  
克復し以て帝國の光榮を保全せむことを期す



御名 御璽

明治三十七年二月十日

内閣總理大臣	兼内務大臣	海軍大臣	農商務大臣	大藏大臣	外務大臣	陸軍大臣	司法大臣	遞信大臣	文部大臣
伯爵 桂	伯爵 山本	男爵 清浦	男爵 曾禰	男爵 小村	男爵 寺内	波多野	大浦	久保田	讓
太郎	權兵衛	奎吾	荒助	壽太郎	正毅	敬直	兼武		

常宮昌子内親王殿下

出征の兵士をみて

勇みたつますらたけを、見る度に

つゝかなかれと祈りこそすれ

出征の將卒を思ひ遣りて

くのためいさむ心はもゆるとも

なれぬさむさに肌やこほらむ

旅順決死隊の行爲をきゝて

沈むへきふねに乗居て雄々しくも



みなとの口をふさきつるかな

陸軍の捷報をきいて

御軍はかちわたりぬときくからに

先つこそおもへ益良夫の身を

昨日まで露のおきぬし城のうへに

朝日のみはた今朝なひくらし

雪のふりける夜

白妙にみゆきふり埋むからくにの

野へにふすらん人をしそ思ふ

春の歌の中に

花鳥のいろにも音にもなにとなく

こゝろとまらぬ春にもある哉

祝捷會の提灯行列を見て

國民のよろこひいはふもろこゑは

みやこ大路になりひゝきけり

周宮房子内親王殿下

出征の將卒を思ひ遣りて



浦安のくにをはなれていくさひと

ゆきにふすらむるこしか原

紀元節の日に

御軍は日のもとづくにかちたりと

みたまも天にきこしめすらん

旅順閉塞隊の行爲をきゝて

鬼神も泣きぬへきかな身をすてゝ

ふねを沈めし仕わさきゝては

陸軍の捷報をきゝて

四

陸の仇うちしほまれは先きつ日の

ふないくさにも劣らさりけり

祝捷會の提灯行列を見て

ともしひを手にたつさへて國民の

御代祝ふ聲のいさましきかな

櫻を見て心に思ふことを

しきしまのやまと心のいさきよき

名に匂はなんやまさくらはな

燕の軒に巣くふを

五



みいくさのありとも知らて軒傳ひ

のとかに遊ふつはくらめかな

夏のはしめに

冬よりもなほたへかたき夏はきぬ

身をいたはれよ益良夫のとも

閑院宮載仁親王妃勳一等智恵子殿下

日露戦争につきて

ふないくさかちつゝきたる御いくさは

くかにもあたをうちや盡さむ

山階宮菊麿王妃勳二等常子殿下

折にふれたる

朝夕にかみにむかひてみいくさの

かつことをのみ祈るころかな

我君はいくさにいてゝまこゝろの

あらんかきりを盡しますらん



久邇宮邦彦王妃勳二等倪子殿下

八

廣瀬中佐の勇ましき戦死を聞きて

ものゝふのみちにちりにし櫻はな

いつの世までも香に匂ふらん

身は船とともに沈めてをしくも

あたのみなとをふさきつる哉

賀陽宮邦憲王妃勳二等好子殿下

折にふれたる

御軍のたゝかふことにかつ見れば

神もいて、やまもりますらん

いくさ人つるきいよくとき磨き

しこのしこくさかり盡してよ

待旅順口陥落

今日も亦鈴の音聞きてかのみなと

おちししらせを待ち渡るかな

雨中進軍

山みちにしのつくあめも物かはと

九



進むみいくさいさましきかな

遼陽の占領を祝ひ奉りて

うちつゝき仇のとりてを攻取りて

いよゝかゝやく日の御旗かな

伏見宮博恭王妃勳二等經子殿下

折にふれたる

とつ國の海路はるかにひゝくらし

わかみいくさのかちときの聲

梨本宮守正王妃勳二等伊都子殿下

繙帶製造をなしつゝ

つゝとらぬ女なからもくにのため

なしえむかきり勉めてしかな

をりにふれて

日の御旗うるるの山に押し立てゝ

君か代うたふときは來にけり



故北白川宮能久親王妃勳一等富子殿下

赤十字社にて繙帶をまきける時

白布にあかきこゝろをまきこめて

つなきとめはや人のたまの緒

出征の軍人を思ひやりて

いくさ人君かためとはいひなから

いかに寒さの身にはしむらむ

勝報をきゝて

かちいくさしらする文をみる度に

まつつはものゝ上をしそ思ふ

故華頂宮博經親王妃勳一等郁子殿下

をりにふれたる

御軍にいさをあらはすものゝふの

つよきこゝろそ尊とかりける

久邇宮篤子女王殿下

水 雷



四方の海に轟きにけりあたのふね

うちくたきつるいかつちの音

軍艦

日の本の國のまもりのいくさふね

かすそふ世こそ嬉しかりけれ

遠征軍をおもふ

君か爲とらふす野邊のゆきふみて

仇まもるらんますらをのとも

出征軍人の家族の心を思ひて

老らくの杖とたのみしひとり子も

家おもふなどいましめにけん

騎兵

後れしとくつはみそろへ乗出たす

駒のあかきのいさましきかな

待旅順口陥落

かの港あたのまもりのかたくとも

攻め入らん日はほとやなか覽

雨中進軍



雨降りて暗き夜半にもいくさひと

あたのとりてに進み行くらん

遼陽の占領を祝ひ奉りて

こゝそとて仇の守りしとりてさへ

わかみいくさの物となりనికి

宣戦の大詔を捧讀して

侯爵 鍋島直大

しき島の大和こゝろをわたつ海の

内外に見せむみことかしこみ

國民の身のほとゝくに真こゝろを

君につくさむときはこのとき

陸軍教授 丸山正彦

國こそりこゝろは矢たけはり弓の

ひいてはなたぬ大みことこのり

御歌所録事 遠山英一

人の道ふまぬえみしをこらさむの

大みことこのり讀むもかしこし



加藤義清

をすら男は大みことのり畏こみて

こたへまつれりかちどきの聲

大須川信行

うへなはぬ國はあらしな天のした

今日しきましゝ大御ことのり

清水方涯

よこしまの國うてよとそ宣まへる

神のみこゑのうるはしきかな

吉峯浄

大君の大みことのりきゝもあへす

宜輝のいさみたつなりやまどくに民

藤崎虎二

ほことらぬ身は營業にはけむこそ

大御こゝろにかなふなりけれ

藤田ともし子

みことのり下したまへり益良雄の

大國御國につくすときはこのとき

山口清敏

おほ君のたけきみいつのはた風に

もろくこほるゝつゆのくに原

岡崎常磐

ひと筋にまもれつはもの千早ふる

神のみすゑのきみの御のりを



四 永田秀石

露西亞なるみやこに皇旗押立て、

かちどきあくる時は來にけり

兼行文集藏

ものゝふのむれにこそいらね朝夕に

ちからのかきり國につくさむ

大國魂神社に宣戰奉告祭の御使とし

て参りけるとき

男爵 千家尊福

みいくさのしろに捧けむ白かねを

ゆたかに見せてつもる雪かな

靖國神社へ宣戰奉告の御使つかへま

つりしをり

萩原嚴雄

海山になほも出て、やまもるらむ

國にたふれしかみの御たまは

此頃召集せられし兵士のあまた我邸

内にあつまりて列を正して立ならひ

其隊長とみゆる人のかしこくも宣戰

のみことのをよみきかすを見て

侯爵北堂 前田朗子

みことのかしこみてきく武夫の

盡すこゝろやひとつなるらん

大君のみこゝろつくしかしこみて



大君の思はすそてをぬらす今日かな  
かすならぬをみななからも大君の

宣戦の詔勅下るを待ち奉りて

陸軍少尉 檜 崎 庸 輔

黒鷲をどく打てよとのみことのり

征露軍宣戦の詔を紀元節の日かしこ

み奉りて 財 部 實 秋

すめろきの遠つ御祖のそのかみの

みこと畏こみうちてしやまん

三島大社にて宣戦奉告祭を拜み奉り

ける時 鈴 木 八 束

皇軍の御稜威をあふくかみかきに

皇軍かちときつくる鶏のこゑかな

日露の國交破れたるを聞きて

大 槻 延 世

いさゝらはうちこらしてん大君の

皇軍みことに背く露西亞の醜等を

月の四日某師團に動員の令下りし時

陸軍少將 佐 々 木 直

虎すめる國のさかひにこま立てゝ



御楯きつかむときは來にけり  
かねてより我大きみにさゝけてし

皇威發揚

男爵 高崎正風

天つ日のてらさむかきり大みいつ

かゝやかすへき時は來にけり

皇軍奮進

萩原巖雄

肉のやま骨のはやしも出てくへし

やかて仇うつ西伯利亞の野に

あたならぬ人のこゝろも寒からし

西伯利亞の野に御旗すゝまは

國威宣揚

大矢廣藏

天の下かゝやきわたる日のもとの

ひかりは君かみいつなりけり

入山谷盛敏

しきしまの大和の國の日のみはた

天かしたにそかゝやきにける

原莊太郎

大そらにのほる朝日はたかせに

ふしなひきけりしこのしこ草

立野道子



うみ山になりわたるまで勝ときを

あけつゝかへれますらをの友

大ささづのむらさき 武雄 釵子

いのちをは君にさゝけて妻子をも

かへり見さるやますらをの友

報國盡忠

矢田部 藤吉

高麗の野やもろこし原にあら鷺の

たけりくるふを打てや益良夫

舉國一致

深澤 清作

大きみの大御こゝろをかしこみて

今もいふ御國のわたをうちはらひてむ

王師

鉢嶺 清才

あめつちの神もいかりて打出つる

すめみいくさに誰かむかはん

出征軍人を送りて

伯爵 松浦 詮

けふよりはしへりあの野に日の御旗

たてむいさを待こそわたれ

侯爵北堂 細川 宏子

家ごとに御はたかゝけてみいくさの

出立立入出かど出いはぬ人なかりけり



出て立たん御いくさひとを國民の  
いはふこゝろもいさましき哉

子爵 長岡護美

千里までこゝろこそゆけあつさ弓

ひきとゝむへき旅ちならねは

くろかねの峰の岩かどふみならず

山並軍こまにむちうてますらをの友

子爵 前田利徳

いさましき君かかとてに老の身も

ともなはれたき思ひこそすれ

子爵 水野忠敬

今よりはしこくさはらひ進みつゝ

わか日の本のひかりしめせよ

典侍 高倉壽子

國の爲身をかへりみぬますらをの

名は残るらんよろつよまで

志きしまのやまと心のひとすちに

まことのみちにすゝみませ君

權典侍 千種任子

みいくさにてゆく人は國のため

おもふこゝろの外なかるらし

松平健子

出たゝむみいくさ人のまこゝろも

おしはかられていさましき哉



掌典 宮地 嚴夫

いくさ人おしたて、ゆく日の御旗

あふきてもろく露やきえなん

掌典 北郷久政

日の御旗うらるの山のいたゝきに

たて、かへらん時をこそまて

千家尊弘

額にはいた矢たつともあたひごに

そひらな見せそますらをの友

御歌所寄人 小出 榮

しへりあの野へのしこ草刈つくし

かへれわか友いはひてまたん

萩原丁嚴 雄

ふく風はつるきに似たるうらる山

ゆきふみしたき君はゆくらん

伯耆 西三條 實義

ちさををも荒す大ざりうちとりて

御國のみいつかゝやかせきみ

遠山 英一

いて、行く車は見えずなりにけり

またよろつよの聲はとよめと

佐々木 信綱

さらはよと立いつる人おくるつま

勇ましきにもなみたくましき



岩崎勝從

いさましくいさをたてなん國の爲

つくさん時はあはれこのとき

小金井喜美子

しへりあに積れるみ雪うらしほの

あつきこほりに身をいとへ君

中村禮子

かちときをわけて歸らんいくさ人

おくるわれさへいさましき哉

竹下種長

天皇の御稜威を身にはよろひつゝ

大御はた手のさきかけにたて

小澤幸民

憎き鷲狩りつくすへきときは來ぬ

いさやすゝみてゆけよ益良男

角田ともゑ

よろつよの聲こそよめいくさ人

おくりむかふるうまや／＼に

大道寺繁禎

浦汐のからきめ見せてしこくさを

西比利亞遠くかりはらはなん

兵動ほさ子

のる人もものらるゝ馬もいさみつゝ

いてたつさまにかちはみえ見



上野兼子

常ならば別れはかなしかるへきに

いさみ立てもおくる今日かな

印東丹靈

しこ草をうち靡かしていさをしを

いく千代までも残せますらを

英光英

鷺のすむうらるの山をたひらけて

朝日のみはたたてよますらを

西野宮子

ゆくさきはふゝきのなかそ心して

矢玉のほかにも身をないためそ

前島士亮

送らるゝ旗よりたかきみいさを

たてゝかへれよますらをの友

菅野喜太郎

ふるへ君そのしへりあの奥までも

きたひあけたる大和こふしを

麻蒔義嶽

とつくにの人もおのゝく日の本の

ますらたけをの名を揚て來よ

竹崎嘉通

しへりあにしける醜草かりそけて

すめらみくにの道ひらきせよ



關川精一郎

うなる子も片言なからますらをの

門出をおくるはんさいのこゑ

羽田種子

つるき太刀ときてみかきて切味を

ほこりやすらむ日本ますらを

大柳田秀子

ますらをか母とわかれのひと言は

雄々しきものゝ悲しかりけり

真野好文

きみか名をこま唐山のはてまでも

かゝやかすへき時はこのとき

橘順榮

なみたをはすゝりに寫し歌かきて

君をおくらん西比利亞の野に

矢鳥義道

大君のみたてとなりてすゝみゆく

仇の野やまにたてよいさをを

佐々豊水

立いつるみいくさ人のをたけひの

こゑいさきよき朝ほらけかな

鈴木雅雄

大鷲を手とりになしてすみやかに

かへりきませよやまと益良夫



鹽原熊次郎

春かせにすめら御國のいくさはた

ひるかへしゆく益良雄あはれ

福田操三

大君のふかきめくみにむくゆへき

ときはこの時すゝめますら男

辻村通子

いさみたつますらたけをの心には

君とくにとのほかなかるらん

秋山すみ子

名におへるきたの荒鷺うちとめて

いさをゝたてよ大和ますらを

小泉詠歸

ちらはちれ若木のさくらかくはしく

名をみいくさの庭にのこして

山東泰子

いひ残す言葉なしとていつる身も

いふにまされる思ひなるらむ

氏政長作

國のため醜のえみしらうちはらひ

歸り來まさんときをこそ待て

羽田種子

ほまれあるみいくさ人の數に入る

君かうへこそうらやましけれ



某將軍の出征を送りて

侯爵 山縣有朋

いつも先はゆつらさりしに軍ひと

送りていはふ身こそおいぬれ

井原陸軍少尉の從軍を送りて

伯爵 東久世通禧

ものゝふの道をつくして末とほく

潔きよき名を擧げよこそ思ふ

雨ふる夜兵士のいて立つを

侯爵夫人 鍋島榮子

雨風もいとほすゝむものゝふの

御國をおもふこゝろ雄々しさ

清見寺下にて征露軍隊をのせたる汽車にあふ道行く人々立とゝまりて萬歳とよぶに

御歌所寄人 中邨秋香

これにこそくにの命は積まれたれ

けに萬さいといふへかりけり

陸軍中尉松平恒吉君の出征を

小出 榮

筑波ねのおほちおとゝの高き名を

君かゝやかせしへりあの野に

相澤陸軍少尉の出陣を送りて

藤田時尾子



こと國の舟のかすくよするとも

日本かたなにきりはらはなん

弟か出陣を送りて

武田貢子

君かため死ねとをしふる門出にも

なほさきはひを祈りこそすれ

勇ましくおくりなからも人しれぬ

なみたそ胸にわきかへりける

我子か遠征の首途に

横山清男

あたと見し國うちむけよ日の本の

益良たけをのたけふまにく

西堂陸軍少尉に送る

丸山正彦

貝加爾の清きなきさに血かたなを

振すきつあけよかちとき

我艦隊の佐世保出發の寫真を見て

西野宮子

いくさ船のせてゆくらむ益荒夫の

くろかねよりも堅きこゝろを

森山海軍少尉の出征を送りて

藤田時尾子

勇ましき大和ますらをいさきよく

うちしつめてむことくにの舟



田中儀平か久しうわつらひてあやう  
き程なるに二勇の豊吉か出征するを  
思ひやりて

兵動ほき子

病みなから子を勵ましていてたゝす

親のこゝろのあはれなるかな

首途

陸軍大將男爵

西寛二郎

いくさひとこゝろの劍研きみかき

ひかりをはなつ西比利亞の原

この春はつゝちか岡をよそにして

高麗の荒野のはなをみるらん

御用船仁川に入らむとして船員等に

わかれむとするとき

佐々木直

古への宇治のいくさにいやまさる

いさを立てむありなれの河

初瀬川はなもみちも散りはて

かくはしき名は世に流れけむ

留別

陸軍工兵大佐

榑原昇造

先つ行きて君をし待たんあつさ弓

春日かやく高麗のあら野に

馬關を過くるとき



陸軍歩兵中佐

伊豆凡夫

いくさふね赤馬の關を出て行けは

霧立ちまよふふるさとのやま

出發に際して

陸軍歩兵中尉

桂勇喜

滿洲にちりにしはなのいろかをは

海はらかけておくれはるかせ

豫て教育せし兵卒召集に應して來營

したる久振のうれしさに

かゝれとて植ゑにしその、櫻はな

今日匂ふへきときは來にけり

佐世保出發の際よめる

海軍二等機關兵

谷田志摩生

豫てより待にし甲斐の今日ありて

いくさの庭にむかふうれしさ

日露戦争により宗教大會を開きしと

きに

千家尊弘

鉦とりて仕へぬ身にもくにのため

つくさむ道のあらぬものは

戦勝祈禱

加藤義清

人みなのをたくしならぬねき事は

神もかならすきこしめすらむ



山本惠篤

皇軍の勝ちをいのれるわれひとの

そのまこゝろは神やうくらん

津田吉親

大神にぬさとりむけてみいくさの

勝ちをいのらぬ人なかりけり

廣田直雅

み軍のふな出なりけり今日よりは

守りたまへやわたつみのかみ

神山正良

大方のねかひはおきてみいくさの

かつことをのみ先つ祈るかな

熱田皇太神宮にまうて、

光田文次郎

しへりあの草なきはらふみつるきの

めくみあつたの神そたふとき

朗善公使

男爵 渡邊千秋

すみなれし霞かせきやゆめにみむ

花なきくにのはるのよなく

たひらきのなる日は又も歸りこよ

きみかまこゝろ人や知るらん

御歌所参候 大口鯛二

汝か國にかへりつきなは矛ふせて



はやく降れとつけよこきしに  
船よするみなとくくにまけいくさ

きつゝ國にかへりゆくらむ

遠山英一

國のため君かつくし眞こゝろも

むなしく歸ることやくやしき

加藤義清

あたとしも思はさるらむわか君の

恵みのつゆにうるほひし身は

鈴木雅雄

村きものこゝろつくしの其甲斐も

あらしとなりてかへる君かな

ローゼン男を送りける時

侯爵夫人 鍋島榮子

妻も子も打つれ立ちて行く見れば

仇としりてもあはれなりけり

兵士送迎のさまを

宇都宮信亮

母のせにおはれて出しみどり子も

片ことなからよはふよろつ代

露探

御歌所参候 千葉胤明

御らくさの門出をいはふ血祭りに

まつこの犬をきるへかりけり



加藤義清

つゝとりてわれに射向ふ仇よりも

にくきは彼かこゝろなりけり

遼東還付の當時を思ひ出て

大口鯛 二

一度はまきてかへりし日の御はた

またおしたてむ遼どうのやま

たなそこの珠奪はれしそのかみの

うらみはらさむ時は來にけり

●仁川海戦

二月十日瓜生第  
二艦隊司令官發

九日正午露國軍艦ワリヤーク及コレイツ仁川港より出で  
來る我艦隊之れを八尾島以西に邀撃す砲戦三十五分の後  
彼れは仁川港に退却せり午後四時三十分コレイツは爆發  
し其後ワリヤーク及露國汽船スンガリも破壊沈没せり  
我艦隊は一の死傷者なく船體も損害無し軍氣大に振ふ



天津日のてらさんかきり大みいつ  
かゝやかすへき時は來にけり  
二月十日の口すさみ  
海軍少將 肝 付 兼 行  
かちいくさ祝ふみはたに國たみの  
わかきこゝろの見ゆるけふ哉  
二月九日に  
御歌所寄人 坂 正 臣  
われとわかへる磯邊に碎けり  
神の御ふねにむかふあななみ

開 戦

男 爵 高 崎 正 風

天津日

かゝやかすへき時は來にけり

二月十日の口すさみ

海軍少將 肝 付 兼 行

かちいくさ祝ふみはたに國たみの

わかきこゝろの見ゆるけふ哉

二月九日に

御歌所寄人 坂 正 臣

われとわかへる磯邊に碎けり

神の御ふねにむかふあななみ



仁川の海戦に敵艦二隻をうちしつめ  
たりときゝたるをり

千葉胤明

これをまつ手初めにしてあたの艦

あらむかきりやうち砕くらむ

榑崎庸輔

外國にひゝきわたらん日のもとの

みいくさふねの勝ときのこと

兵動ほき子

ふな戦まつかちたりときくやかて

老もうなるもをとりいてたり

逸見嘉種

みいくさのその手始めにあたの艦

出るまもなくうちしつめけり

樋口作治

わかために打ちくたかれて仇の艦

うみのもくつとなりける哉

村上千代田艦長の仁川在泊中の苦心

談をよみて

千葉胤明

兎に角におもひし程やいさきよく

たゝかふよりも苦しけりけむ

時事有感

侯爵山縣有朋



いかにして君にむくいんかゝる時

いたつきなから老にける身を

侯爵 鍋島直大

バイガルの水くれなるに見ゆる迄

向ふかたきを斬りてなかさむ

日の御旗やかてかゝけむ人のみち

今日よりはうみにくぬかに御軍の

かちときあけぬ時やなからむ

農工業をますく、勉むへきことを演

説しけるをり

男爵 千家尊福

いくさひといさむこゝろを産業の

うへにうつして勉めさらめや

甲辰の春をりにふれて

男爵 渡邊清

このはるはすめら御軍の旗の手に

にほふさくらの花をまたるゝ

立春朝おもふこゝろを

男爵 藤枝雅之

みいくさのすゝむをりしも朝日影

てりかゝやきて春たちにけり

折にふれて

陸軍少将 佐々木直



虎すめる國のさかひにこまたてゝ

み楯をつかんときは來にけり

かねてより我おほ君にさゝけてし

身を捨てぬへき時はこのとき

男爵 石河光熙

御軍はうみをわたりていてにけり

しこのあた浪いまそくたけむ

權典侍 小倉文子

親も子もかへりみすしていくさ人

君にいのちをさゝけゝるかな

前田朗子

いさましきみいくさ人のいきほひに

あた野のつゆやもろく碎けむ

大君にむくいまつらんときは來ぬ

いよ／＼みかけ大和たましひ 美子

掌侍 小池道子

老の坂こえしをみなもかゝるとき

盡さむみちのなからましやは

主殿助 川上鎮石

君か爲えみしうつ世にあひぬれど

老たる身こそくやしかりけれ

時事偶感

陸軍歩兵少佐 森氏男

龍と云ふ今年とゝもにきたそらの



あやしき雲をふみやふらまし

陸軍一等軍醫

飯島茂

銃とらすかたな揮はぬ身なからも

君思ふこゝろのなに劣るへき

陸軍歩兵中尉

堤角一

をしまれて玉となりつゝ碎けよな

瓦となりて世にあらんより

大君のためとおもへは降るゆきの

なかにほゝゑむ梅のはなかな

小金井喜美子

親に子にうからに友におくられて

ゆく益荒雄のほこらしけなる

尾崎正語

うくひすの初音よりなほこの頃は

またぬ日もなし號外のことゑ

大野秀子

やふさかと世にうとまれて積置し

寶藏ひらかんときはこのとき

富士川武重

今日よりは酒もたはこも忘れつゝ

まことを君にさゝけまつらむ

松澤正澄

御軍のたつときよりむらきもの

こゝろやすめむ時なかりけり



三輪うら子

いさきよくいくさに向ふ益良雄の

かちてかへらむ時そまたるゝ

平岩日基

仇浪はちそひくるとも何かあらむ

藻屑となしてやらむこそ思ふ

高木三樂

君のためはた國のためいへのため

起てよ奮へよやまとますらを

太田尚

いさましき門出いはへと益良雄か

のこす妻子を見るかかなしさ

梶田愛子

太刀はきて出ます兄の雄々しさを

み送るゆふへつきかゝやきぬ

西野宮子

かゝるときつくさぬ人は日の本の

みくにの外におひはらはなん

毛利幾雄

みいくさの數にもいらすたてまつる

ものもなき身の口をしきかな

能勢頼保

あたなせる國のくる船くたかれて

あとしら波となりにけるかな



富士川武重

御祖より傳へくしつるき太刀

わくまで染めんしこの血汐に

安見通

おほみよのはるの光にきえかへる

雪こそあたのすかたなりけれ

寺田秀幸

ますら男か國のためとて妻や子を

かへり見すして出立つあはれ

海軍少尉候補生 宮部光利

哨兵のしはふきさむく夜は更けて

左舷にほそき三日つきのかけ

門末の婦人達に告ぐとて

伯爵夫人 大谷籌子

をみなとてすめらみ國の民なれば

つとめさらめや勵まさらめや

我家軍人の宿舎に充てられたるとき

鶯のなきければ

伊達正子

うくひすも御軍ひとをなくさめよ

もよるこひの聲はりあけて

吾か室も明けわたすとして

文よみしわか部屋にまていくさ人

きてやとれるは嬉しかりけり



始めて雪のふりける時

五十二

丸山正彦

待ちわひし雪はふりきぬ陸路行く

大みいくさのおとつれいかに

日露開戦をきゝて

池澤清弘

大君に捧けまつりし身にしわれは

あたになすてそ益良夫のとも

雪の日外征の將卒を思ひやりて

藤野莞爾

このころは雪かき分けていくさ人

いかなる床にかりねしつらん

### ●旅順海戦

二月十一日東郷聯  
合艦隊司令長官發

聯合艦隊は去六日佐世保を出發したる後總て豫定の如く  
行動し八日正午我驅逐隊は旅順にある敵を攻撃せり當時  
敵艦隊の大部隊は旅順口外にありて我驅逐隊の水雷に掛  
りしもの少くともポルターワ形一隻巡洋艦アスコリツド  
外二隻ありしものと認む我艦隊は九日午前十時旅順口沖  
に達し正午より約四十分間港外に殘留せる敵艦隊を攻撃  
せり此の攻撃の結果は未だ明瞭ならざるも敵に少からざ  
る損害を與へ大に彼の士氣を沮喪せしめたるものと信ず  
敵は漸次港内に逃走するものゝ如し午後一時戦闘を止め  
引上げたり此の攻撃に於ける我艦隊の損害は輕小にして



寸毫も戦闘力を減ぜず死傷は約五十八名にして内戦死四名負傷五十四名なり  
仁川方面に向ひたる分遣艦隊の戦況は既に瓜生司令官の直接電報せるが如し我駆逐隊は敵の砲火を犯して攻撃を果し其大部は既に本隊に合せり艦隊に御乗艦の各殿下は皆御無事なり我將卒一般の戦闘に従事せる状況は頗沈着にして恰も平常の演習に異ならず戦闘後に於ける士氣は益々旺盛にして而かも舉動は愈々沈着なり今朝來風波ありて艦船間の交通不通の爲め未だ各艦よりの詳報に接せず不取敢右概況のみ報告す

海軍の大勝利をきゝて

鍋 島 榮 子

外國のはてまでひゞく勝ちいくさ

いよゝははけめ大和ますら男

子 爵 梅 溪 通 治

ますらをはやまと心をあらはして

まつ海はらをしめてけるかな

松 平 健 子

いさましくかたきの船をうちしつめ

手はしめよしといはふけふかな

千 種 任 子

軍ふね打しつめたるあらなみの



うへにかゝやく日の御はたかな

文學博士

木 邨 正 辭

荒鷺のおそろしやともおもひしか

もろくも羽かひうたれける哉

宮 地 巖 夫

騒きたるわたのみなどのいくさ艦

けふり寂しくなりにけるかな

丸 山 正 彦

天つ日のひかりさしそふわたの原

向ふどころにあたなみ立たす

小 出 榮 榮

いくさ船かちしたよりに浪たて

みやこもゆするよろつ代の聲

鍋 島 茂 子

ためしなき此御いくさに加はりて

勝ちしひとく嬉しかるらむ

東 久 世 玉 子

天つ日の佐世保をいてし益良雄の

いさをかゝくる海のうへかな

岩 倉 米 子

たくひなきみいくさふねに武士の

名は雲井までとろきにけり

御歌所參候

鎌 田 正 夫

吹おろすやまと島根の夜あらしに



鷺はつはさを折られけるかな

千葉胤明

たのみつるその親ふねも碎かれて

うかふ瀬なしと世を歎くらむ

加茂瑞穂

日の御旗かゝやきわたるうな原に

くたけて消えし露のあたふね

須川信行

たちさわく浪をしつめて日の御旗

ふたゝひたてん時は來にけり

兵動ほき子

かちときの聲もきこゆる心地して

あなありかたしけふのにひ文

青砥環

ますらをはすゝみくゝて仇の守る

みなどの船をうちしつめけり

柳田秀子

勇ましきみいくさ艦のつゝおとに

仇はきもをやまつゝふしけむ

大野泉

天つ日のひかりに消ゆるしこ草の

露のいのちをはかなかりける

神道壽

大君のみことかしこみいくさひと



あたの黒ふねうちくたきけり

石丸かな子

あたの船うちしつめけん海はらの

御船にとよむよろつ代のこゑ

中野半

魚かたの水のいかつちどゝろきて

あたのくる船うちくたきけり

山田善之助

しきしまのやまとたましひ大砲に

こめてそ仇をうちくたきけん

鶴田千秋

十とせまへうちやふりにし氷より

なほはかなくも碎けゝるかな

木谷壽子

さらぬたにみいつ輝く日のもとの

みいくさ船のひかりそひつゝ

吉水宣正

あつさ弓はるをも待たて仇のふね

こほりと共にくたかれにけり

菊地盛實

敵の船くたくひゝきになかき夜の

ねふりをさませどつくにの人

酒井勝貫

あたの船まつ沈めぬる音つれに



かちときあけてよろこひに鳥

高木三樂

かちときの聲と共にふるふかな

君かみいつはあたのみなとに

南喜作

闇の夜に五百重の浪をけやふりて

仇うちくたくふねのをし

三浦海軍中尉の戦死を悼みて

都築高庸

君か身はたまとひとつに碎けても

たかきいさをは世にそ残れる

富士乗組三浦中尉

宮崎奈美子

艦の名の富士よりたかきいさをしを

千代にのこして散しきみかな

梶村候補生

渡邊千秋

いかにしてまたうら若き梶の葉の

一夜のしもにちりはてにけむ

大口鯛二

つほみにて散りし初瀬の山さくら

かくはしき名はよろつ代迄に

遠山英一

かくはしき君かその名は言の葉の



はなど共にそ世にのこりける

薬師川亮音

あくれしと早くも君はちりはてぬ

はつせの山のはなゝらなくに

高橋種之

初瀬山さかりのはるをまたすして

つほみなからに散るそ悲しき

舍弟梶村文夫の戦死をきゝて

志兵中尉 土方清

初瀬やま山よりたかきいさをしの

名をのこしけむ和田つみの底

辭世

海軍少尉候補生

梶村文夫

名も初瀬いくさもこれか初めなり

あくれはとらし國のみために

露艦わか商船をうちしつめたるを

鍋島榮子

戦ひのみちもしらすやみいくさの

艦にあらさるふねをしつめて

奈古浦丸船員の生還をきゝて

大口鯛二

家ひとは夢にゆめみしこ、ちせむ

うせぬと思ひし人のかへりて

紀元節の日



佐々木 信綱

大宮のゆにはのうちにかなから

神に告げますこのかちいくさ

戦地にて神武天皇祭の朝旭日を見て

陸軍一等看護長 庄司 祐亮

しのゝめの空くれなるに昇る日は

八咫のかゝみのひかり也けり

紀元節に皇軍の勝利を祈りつゝ

中島 隈治

天てらす神の御稜威をとづくにの

北のはてまでかゝやかしませ

立春の日師團の動員令を發せられけ

れは

内村 昂

あら鷺の羽風さわけどうらやすの

國はのとけくはるたちにつけり

大群の動員令發布の折に

伊勢 齋助

みいくさの後の備へどつはものを

めさるゝけふそ雄々し刈ける

國債應募

男爵 高崎 正風

仇うたむためのおひめは國たみの

かたにおもきを覺えさりけり



阪正臣

御軍のかすならぬ身はこれをたに

國のみたてと負ひてつかへむ

成田聽泉

仇うたんいくさの資をみつくこそ

くにつみ民のつとめなりけれ

鞍智芳章

大君のめくみのつゆはやまふきの

花のかすにもしるき今日かな

扇松穆

つみおきし黄金も今ははなさきて

御國のためになるそうれしき

國庫債券の募集のために演説しける

とき

男爵千家尊福

御軍につらならぬ身もしろみつく

みちには人におくれさらなむ

軍資獻納

男爵渡邊千秋

國のうちにつみし黄金も大つゝの

ひかりとなりて世をてらし身

いのちさへすつへき世には白金も

こかねも何かわれをしむへき

大口鯛二



ふたつなき命をさへにさゝくるを

黄金しろかねなにかをしまむ

樋口國五郎

み軍の數に入らざる身にしあれば

こかねさゝけて君につくさむ

土井池源吉

ほとく／＼につみてさゝけよ黄金草

花のさくへきときはこのとき

戸島重巽

たてまつるかねこそなけれ國の爲

つくすこゝろの一つのみにて

小林元治郎

つとめつゝつねにこかねを積置て

國にさゝけんときはこのとき

土田道一

いさゝかの生業なしておくる身も

こゝろはかりを捧けまつらん

成田聽泉

まつしとてやみぬへしやは僅なる

こかねなりとも捧けまつらむ

貯藏金屬器をさゝくる人々のおほし

ときゝて

男爵千家尊福

白かねもこかねも國にさゝけつゝ



さしそふ家のひかりをそ思ふ

金銀提供につきて

伊達正子

これもまた國のためには捧けてむ

黄金のかさしひとつなれども

明治三十七年二月内務省より發せら

れたる訓示を讀みて

綠野多三郎

進みゆくみいくさ人のこゝろもて

わさいそしめよあはれ國たみ

東宮へ御使に參りける道にて農夫の

馬をひくをみて

掌侍 小池道子

御軍のみちにたてんとしつのをも

てかひの駒をひきて出つらん

或地方にて馬匹徴發の光景をみて

森田春次

ひきよせてえらひあけたる軍馬の

あたへも聲も高くそありける

軍馬徴發

遠山英一

くるまひく馬もめされてあて人も

おほかた徒歩に成にけるかな

伊藤忠恕



御軍にひきいたされてしつか飼ふ

こまもいさめる春の野邊かな

神鳩

男爵 高崎正風

御いくさに事ふる鳩はいにしへの

やまのからすの跡やちふらむ

男爵 渡邊千秋

あらわしに告げよかみ鳩三人のみ

いきて歸りしむかしかたりを

坂正臣

神いくさいまかたつらん御尾前に

鳩そむれゆくつはさきよめて

鎌田正夫

かみもまつはとの使をつかはして

君か御いくさまもりますらん

大口鯛二

みたらしにつはさ清めて鳩もまた

大御いくさのさきにたつらむ

遠山英一

御軍につかへむものとみそきして

鳩もやしろをたちいてにけむ

須川信行

みな人のねかひをいれしはこ崎の

神のつかひにはとやたちけん



三橋中雄

禊してすめらみいくさにあともひし

鳩もあやしきかみにさりける

松久禹門

はこさきの宮居の鳩はみいくさの

すゝみゆくてを守るなるらむ

住本千秋

みいくさの道しるへにと神はとは

しへりあさして出立ちにけん

松澤正澄

御軍のしるへせんとや千はやふる

神のめてますはともいてけん

財部實秋

八幡やまかみの使ひのはどのむれ

みいくさ船をまもりてやゆく

小笠原長祥

大船のけふりにむせふうなはらに

玉とくたけて見ゆるかみはと

高千穂靈火

宮地嚴夫

世をまもる神のみいつは高千穂の

高根の火にそあらはれにける

加藤義清

高千穂のみねの神火はみいくさの



進みゆくてをてらすなるらむ

富士川 武重

みいくさの守りとなりて高千穂の

御祖のかみやいて立ちにけん

天佑

阪 正 臣

祈らても道にかなへるみいくさは

あまつ御神やまもりますらん

遠 山 英 一

たゝかへは必ずかちをしめてけり

神のまもれるおほみいくさは

軍 人

權掌侍

北 島 い と 子

天津日の御旗に向ふあははあらし

すゝめや／＼やまとますらを

相 羽 彌 平

しき島のやまどこゝろの光りこそ

とつ國までもかゝやきにけれ

舞 田 貞 子

荒わしのかけるうらるの山なから

奪ひとらすはやましとそ思ふ

矢 島 義 道

玉きはるいのちさゝけて敷しまの

やまと皇國をまもるますらを



● 第一回旅順口襲撃

二月十六日東郷聯合艦隊司令長官報告

二月十三日驅逐艦の一隊大風雪を冒して旅順口に向ふ途上各艦を見失ひて相分離せしも司令艇速鳥及朝霧のみ旅順口外に達し朝霧は十四日午前三時港口を偵察し盛に陸岸砲臺及哨艇の砲火を蒙しに拘らす黒烟を上居る一軍艦に對し水雷を發射し且敵の哨艇を砲撃して無事歸來れり速鳥は五時旅順口外に達し港口に近接し敵の二艦を暗中に發見すると同時に其砲火を受たるも直に一軍艦に對し水雷を發射し其爆發を確認して無事歸來せり速鳥朝霧の勇敢なる襲撃の効果は暗夜の爲知るに由なしと雖寡くも敵をして益戰慄せしむるの大功ありたるは疑なしと認む







ふたゝひふねをくたきける哉

松久禹門

いく度かあたのくろ船うちくたき  
御國のみいつかゝやかすらむ

水雷艇

華族女學校學監

下田歌子

稻妻の目にもとまらぬはやふねの

行手にひゝくいかつちのおと

九鬼憲子

雨とふるたまの下ゆくはやふねは

ときいかつちも及はさりけり

水雷

田中直二

鳴神はみそらはかりとおもひしを

ひらけゆく代は水くゝるなり

祝春日日進二艦安着

男爵 渡邊千秋

みいくさのふねをもちし外國の

ひとのこゝろを思ふけふかな

大冨口鯛二

事もなくつく艦みても和田つ海の

神のまもれるほとをしらるゝ

遠山英一

きつかひし御いくさ艦の事なくて



みなといたりする今日を嬉しき

春日艦

兼 島 景 福

春の日のしほ路のどかに渡りきて

みいくさ船のちからそへけり

日進艦

護 得 久 朝 常

日にすゝむわかみ軍のふねの名の

上にもしるくあらはれにけり

● 第三回旅順口攻撃

二月二十六日上村第一艦隊司令長官報告

我艦隊は總て豫定の通り行動し二月二十三日夕旅順方面に近づき旅順港口閉塞の任務を有する特別運送船隊並に其乗員收容の任務を有する水雷艇隊を放つ翌二十四日午前十時豫定集合點にて各驅逐隊水雷艇隊に會す港口閉塞の狀況は報國丸は港口左側燈臺下に武州丸は其外方に至り各自から破壊沈没天津丸武陽丸は老鐵山の東に至り自から破壊沈没仁川丸も亦自ら沈没す以上五隻の乗員は總て收容し得て無事なり我驅逐隊水雷艇隊も總て無事にして港外にバヤーン、ノヴヰツク及び敵の驅逐艦四五隻あるの報告を得たるを以て同夜我驅逐隊水雷艇隊を分つて旅



順口大連灣及び鳩灣の偵察襲撃を命ぜらる

艦隊は迂路を航し二十五日午前七時豫定集合點にて各驅逐隊水雷艇隊に會合せしも未だ其戰況を詳かにするを得ざりし其れより本隊は旅順口に向ひしに港外左方に當りバヤーン、アスコリツド、ノヅヰツクの三隻徘徊し居るも遠く出でず砲臺下を陸岸近く東西するを見午前十一時四十分五分より敵艦及び陸上砲臺に向ひ遠距離砲撃を始む砲艦及び陸上砲臺應戰せしも正午過五分ノヅヰツク先づ港内に逃れアスコリツド、バヤーン續て港内に逃走せり此分にては港口閉塞は其効果少なかりしが如く甚だ遺憾に堪へず是に於て各艦巨砲を以て港内に向つて砲撃を行ひ盛んに火焰の揚がるを見る砲撃十五分の後之れを止め引上げ

たり此砲戰にて多少敵に損害を與へ且つ港内を威嚇し得たりと信ず

此間我巡洋艦隊は老鐵山附近にて西方より來れる敵の驅逐艦二隻を認め其一を逸せしも他の一隻は之を鳩灣に追窮し終に之れを撃破せり

我艦隊總て一の損傷なし東郷聯合艦隊司令長官は猶ほ前進地にあり以上は司令長官より報告あるべきも本官より不取敢報告す



旅順閉塞隊

鍋島榮子

ますらをの猛きころのかく迄に

はからるゝ事とはしらすわた人は

うち沈めぬと見しかをかしき

おほきみにさ、けし身とて潔よく

死なるときそふ船いくさかな

男爵 千家尊福

あた舟のゆきかふ道のしからみに

身を沈めてといさみたちけむ

下田歌子

大旅



大砲の火くちにむかふふね見れば

ひとは神にもおとらさりけり

神の手にすくはれにけり水そこに

沈むと見えしますらをあはれ

角田ともゑ

石をつみし船もろともに沈めとも

世にとろきぬ高きいさをは

宮地巖夫

國のためなけうちしかと眞白たま

くたけすて皆かへりつるかな

千葉胤明

いかてかは斯るたくみを成し遂む

生きて歸らぬころならすは

須川信行

たけき名を功とともにたてにけり

はかりしことく船はしつめて

清水方涯

石よりもおもきつとめをつみ重ね

沈むるふねにのれるますらを

布施源右衛門

なき物に身をはなしつる船出には

やまとたましひのみや乗けむ

尾崎吉従

わか船をうみにしつめしみなと口



せめふたきたる益良雄あはれ

矢田部興市

大砲のたまかいくゝりますらをか

たてしいさをや神のわさかも

角田履正

又となき花のほまれのいさきよく

ちるをこゝろの大和ますら雄

梅原機關兵(本會河北支部追悼會兼題)

伯爵 東久世通禧

身を棄てゝあたの港をふたきけん

一木のうめのかをりたかしも

男爵 高崎正風

火花ちる吹雪のうちにさきかけて

散りにし梅の香こそたかけれ

侯爵 鍋島直大

君かためふねと共にもすてし身の

ほまれそのこるもろこしの海

鍋島榮子

いさきよくいのちをすてし梅原の

かをりは高くよゝにのこらむ

男爵 渡邊千秋

かへらしとともに誓ひし言の葉を

ふみゆく君かこゝろをゝしも

子爵 竹屋光昭



かくはしくきみか勳ものこるらん

千代の末までみなとふさきて

子爵 水野 忠敬

きみか名の梅もろともに薫るらん

御國のためになてしいさをは

子爵 長岡 護美

世にのこる名こそひろけれ海原に

みつくかはぬは泡ときえても

下田 歌子

はるさむきからのみなとの夜嵐に

をしくもちるか梅のひとはな

文學博士 木村 正 辭

くにのためたてし勳は代々ふとも

くちせさるへし傳へゆくへし

阪 正 臣

名は花とさきこそかをれうめ原の

身はそこひなき海にしつめて

宮 地 嚴 夫

あたなみのさわく港になけうちし

たまこそ國のひかりなりけれ

萩 原 嚴 雄

水そこのこしき岩と身をなして

今もみなとをふさきてやたつ

中 邨 秋 香



をかしつる仇の玉の緒たえてよに

類ひなき名はとろきにけり

小出 粲

身はふねと共にしつめと雲井まで

高きその名はとろきにけり

鎌田 正夫

あたなみに心とちりしうめのはな

かをりしたはぬ人やなからむ

大口 鯛二

たゝ一人かへらぬ君そいたましき

もとより捨しいのちなれども

千葉 胤明

たましひはしつめし舟に止まりて

仇のきもをやなほひしくらん

鍋島 茂子

國のためその身をすてしうめ原の

香はしき名そ世に知られける

鍋島 信子

例なきいくさのつれにさきたちて

たふれし身こそほまれ也けれ

遠山 英一

くすのきのかくはしき名に並ふ覽

つほみなからにちりし梅か香

加藤 義清



大きみの御楯となりてむないたを

百

うちぬかれたる益良雄あはれ

佐々木 信 綱

國のためかくはしき名を残し置て

水泡とちりしうめのはつはな

須川 信 行

身をすてゝ海にしつめしいし船は

君かいさをゝつみしなりけり

船 曳 衛

かくはしき名のみ残してわたの原

泡ときえにし人をしそおもふ

雨 森 巖

おくれしときき出しものを梅の花

なとちらしけむ沖つしほかせ

井 原 豊 作

かくはしき名のみ残して散にけり

またうらわかきうめのはつ花

片 山 今 子

ためしなきいさを残して散はてし

ひと木の梅のかくはしきかな

大 矢 廣 藏

天か下にほへるなかにさきかけの

名にそむかさるうめの花かな

大 矢 弓 吾

百一



さきかけて開きし花のいさきよく

ちれるや梅のこゝろなるらむ

矢 寺 甕 雄

白雪のつもれるはらにさくうめの

花はちりても香ににほふなり

岡 市 正 人

國のためこゝろかためて石ふねと

ともにしつみし君をしそ思ふ

南 耕 信

かくはしき名をはとめて夜嵐に

ちりにし梅のはなそゆかしき

南 復 三

國のためいへをも身をも顧りみす

たゝまこゝろをつくしつる哉

柳 原 大 次 郎

ちりてこそたかき馨はのこりけれ

豊野のさとのうめのひともと

波 多 野 花 涯

いかてこのいさをは立む沈めてし

石よりかたきこゝろもたすは

田 邊 興 三 郎

梅のはなさかりもまたて散ぬれと

かくはしき名は千代に匂はむ

森 本 重 次 郎



折れてこそかをりは高く成にけれ

あはれ若木のうめのひともと

西尾雪江

いしふねと共にその身は沈めとも

名は幾千代も朽ちせさらまし

家村馬吉

梅のはな夜半のあらしに散ぬれと

たかきかをりは世に残りけり

狩野齋一

大船をしつめし夜半のなみかせに

ちりにしうめのかくはしき哉

藤野莞爾

きみかため名もかくはしき梅原の

みをしつめてそ仇ふせきける

仁川丸の舵手二等水兵安保助藏氏

男爵千家尊福

舵とれば波もさわかぬいさをしは

かゝけし舟のほにも見えけり

武州丸の中川一等兵曹

海こしの火にうちむかふおも影を

けふりの中にきみを見せける

決死隊林紋平氏

遠山英一

血しほもてかきなかしたる水莖の



あさにもしるし赤きこゝろは

伊藤忠恕

かくてこそ國のひかりを益良雄か

赤きこゝろの見ゆるなりけれ

鹽原熊次郎

眞こゝろのあかき血しほに命毛を

そめてそ願ふくにのみために

福井義眞

指きりてちかひしふみの血汐こそ

赤きこゝろのかさりなりけれ

橘順榮

血しほもてかきしたゝめし願ふみ

赤きこゝろのいろを見せつゝ

決志隊士谷田機關兵を

雨森巖

國の爲しなんと思ひしまこゝろを

神もめてゝやまもりましけむ

海軍々人の戦死者を悼みて

鹽原熊次郎

國のためうしほの花とちりぬれど

芳はしき名は千代にのこらん

旅順口閉塞船に附隨して決死隊を收容

したる水雷艇隊司令櫻井少佐のもとに

千葉胤明



思ひやるも嬉しかりけり残りなく

すくひし時のきみかこゝろを

はやふさのかけるか如く乗めぐり

すくひあけゝむ大丈夫のとも

死を決して閉塞の任に就く折

海軍中佐 廣瀬武夫

報國のおもひやたかきかさきやま

あさ日に匂ふしきしまのたみ

敷しまの笠置のみやまほうこくの

あさひに匂ふやまとこゝろは

海軍大機關士 大石親徳

敷島のやまどものふこゝろして

亞細亞のうみに波な立たせそ

海軍一等兵曹 米良正義

大君にさゝけまつりしこのいのち

なごて惜まんいまのこのとき

同し折に岩淵上等機關兵曹に送る

海軍三等機關兵 谷田志摩生

玉の緒のよしたゆるとも我たまは

おにともなりて仇をやふらん

旅順口閉塞隊に入り戦死の人々を

千家尊弘

なきからは水つくかはねさくちぬとも

なとかその名の沈みはつへき



●浦鹽砲撃

三月十日 上村第二艦隊司令長官報告

豫定の如く六日朝結氷せる海を航し浦鹽斯德東口に達せり敵艦軍港外に見えずバルサルギン岬半島及ポスフォル海峽砲臺の射界を避けたる位置に接近し約四十分間々接撃を以て威嚇砲撃せし後引上げたり此砲撃は相應の効果ありしと信ず陸上砲臺には陸兵を見しも更に應戦せず午後五時頃東口方向に當り黒煙の揚るを見る或は敵艦の出で來りしが如くなりしも煙は次第に消滅し判明ならず七日朝亞米利加灣スツレロク灣を偵察せしも異狀なし正午再び浦鹽斯德東口に迫りたるも敵艦見えず砲臺發砲せず其れより轉じてポシエツト灣を偵察せしも敵なし







波のうつにもこたへさりけり  
浦港第一回攻撃上村長官の公報を讀  
みて

千 葉 胤 明

幾度もからさ目見せてうらしほの

艦もとりてもとるへかりけり

浦港にある敵の艦隊を

遠 山 英 一

ほともなく御國の艦となりぬへし

のかれていてむ道しなければ

篠 山 晃 三

うらしほのうらの黒船いたつらに

うきすとなりて朽やはつらむ

浦鹽斯德砲撃

鴈 金 養 齋

日の御はた向ふをまちて解ぬへし

うらしほ風にとちしこほりも

仁 保 久 昂

やかてわか占め野となして浦潮の

あかたの春のわか菜つみてん

濱崎兵曹の最期を

千 葉 胤 明

碎かれしこほりは艦にのこりつゝ

水泡ときえしひとそかなしき



鈴木雅雄

うちくたく氷のおとゝもろともに

きみかほまれやよにひゝく覽

寒夜艦上の夜衛を思ひやりて

下田歌子

毛衣のうはきのまそてなみこえて

つらゝゐる夜をもり明すらん

折にふれて

雨森巖

うらしほの氷もうすくなりぬらん

仇のふねともとくうちくたけ

土田道一

あつ氷くたきゆくらしますらをの

うらしほ風はよしさむくとも

東郷司令長官

男爵千家尊福

はたふねの三笠は君かいさをしを

さして仰かむ名に社ありけれ

櫛崎庸輔

わたのふねうちしつめたるみ軍の

ほまれは君かほまれなりけり

大口綱二

あところかぬものこそなけれふな軍

開くすなはちたてしいさをに



遠山英一

打ちいたす玉のひゝきに艦よりも

仇のこゝろをまつくたきけん

須川信行

かすくのみいくさ船にあまる覽

浪のひまなきこゝろつくしは

篠山晃三

わたのはらひろきいさをは大船の

けふりにたちて世にしられ梟

矢島久米藏

いやたかき君かいはさはさし昇る

三かさの山のつきとあふかむ

木庭袋連

天の下かくれなきまておほひけり

さすや三笠のたかきいさをは

瓜生海軍中將

須川信行

にはどりの林にまつはひゝきけん

御いくさ船のよろつよのこゑ

矢田部藤吉

高麗の野のしこ草拂ひつちかひて

やまとさくらの種を植ゑけり

風流艦長の名ある八代大佐を

山領利貞



小部島の千とりも聲やあはせけん

ふく笛の音の千代のしらへに

閉塞隊總指揮官有馬海軍大佐

三橋中雄

旅ころもきつゝいさをゝたち花の

かをりゆかしき君にもある哉

武富磐手艦長

光田文次郎

いはほより堅さいはてに乗込みて

あたの大ふねうちくたきつゝ

天の千亞總督

男爵 渡邊千秋

はるひんは春なほ寒ししはしまて

我御いくさのみいつみせはや

大口鯛二

あなとりし昨日の夢やさめぬらん

わかみいくさの砲のひゝきに

雨森巖

ひたすらに國擴めんとはやりつる

おのかたくみを今は悔ゆらむ

黒鳩公大將の極東に赴任するを

千葉胤明

御軍のまことのちからしるかれか

こゝろの駒やすゝみかねけむ



遠山英一

大君のおほみめぐみをいのちにて

おのか國にもかへらさるらむ  
をりにふれたる

宮部光利

敵味方おなしおもひに見るつきの

明日は何れのかはねてらさん

典侍 高倉壽子

君の爲みくにをまもるものゝふの

やまごころは神や知るらん  
あたなみをけたてゝすゝむみ戦の

舟こそくにのみたてなりけれ

伊達正子

いさきよくにひ文うりの聲すなり

わたの艦をやまたしつめけむ

小山田虎雄

いくさひとおもひやりては小夜衣

かさぬるさへもこゝろ苦しき

北の海さむさをたえてますら男か

たてしいさをそ顯はれにける

飯高勝彦

うてはやふりつけはくたきて軍艦

皇國の名こそとゝろきにけれ



#### ● 第四回旅順攻撃

三月十二日東郷聯合艦隊司令長官報告

聯合艦隊は豫定の如く行動して更に昨日旅順口の敵を攻撃せり

驅逐隊の二隊は同日午前零時旅順口港外に達し港外を搜索して敵なきを認め天明まで港外に留まり乙驅逐隊は各所に特種の機械水雷を沈置せしが敵の要塞は之に對し時々砲撃したるも我驅逐隊は無事其目的を達するを得たり然るに午前四時三十分頃甲驅逐隊は老鐵山の南方に於て約六隻より成る敵の驅逐隊に會し近距離に於て約二十分間激戦し朝潮、霞、曉の三艦は敵の諸艦と殆んど舷々相摩せんとするが如く接戦し敵の三四艦に猛烈なる砲火を加へ



たるを以て敵は或は瀛鐘を破損し或は火災を起し或は悲鳴を揚げ多大の損害を負ふて敗走せり我三艦も亦敵彈の爲め多少の損害を被り死傷十五名内戦死下士卒七名負傷霞の大機關士南澤安雄の外下士卒七名ありたり就中曉は瀛鐘の補助瀛管を破壊せられ一時漏瀛したるが故に機關兵四名熱湯に依り戦死せり但各艦共に戦闘航海に支障あらず又乙驅逐隊は午前七時港外に去らんとする際偶々洋中より旅順口に入らんとする敵の驅逐艦二隻を發見し直に其前路を遮りて之を攻撃し戦闘約一時間多大の損害を加へたる後其一隻を逸したるも他の一隻ステレグシチー號を撃破し敵の要塞砲火の下に於て漣は之を捕獲し曳航しつゝありしも漏水甚しく且つ波浪高く曳綱切斷せしを

以て捕虜兵四名を收容して捕獲敵艦を放棄せり其後午前十時十五分に至り右ステレグシチーは全く沈沈せり此戦闘に於て乙驅逐隊の諸艦にも損傷ありしも多大ならず漣曙の二艦に戦死卒二名負傷曙の少尉島祐吉外下士卒三名ありたり之より先き敵艦ノーズヰク及バヤーンは港外に出で來りて我乙驅逐隊に向ひ進航し來りしが我巡洋艦隊の港外に接近するを見て港内に退却せり我主力艦隊及び巡洋艦隊は同日午前八時旅順口沖に達し巡洋艦隊は直に港口正面に進み我驅逐隊を掩護し次で主力艦隊も亦老鐵山附近に至り午前十時より午後一時四十分まで連續港口に對し間接射撃を行へり巡洋艦の一隊が



港口正面より看的報告するところに依れば其彈着は概して良好にして其効果少からざりしものゝ如し我砲撃中敵の要塞も時々應戦したるも我艦隊の諸艦は一の損傷なかりし又巡洋艦の他の一隊は大連灣外に至り港口三山島に於る敵の建設物を砲撃破壊せり又た高砂、千早は殊に旅順口半島の西岸を索敵せしも敵を見ず前回の攻撃に於て我巡洋艦隊に撃破せられ鳩灣に擱岸したる敵の驅逐艦はウヌシ、テリヌイにして今や檣及び煙突の上部を水面上に現はして沈没し居れり  
我各部隊は午後二時戦闘を止め一旦豫定地點に集合したる後引上げたり

水雷驅逐艦隊接戦

萩原 嚴 雄

しかはねをかさねてふける船屋形

したるゝものは血の雨にして

鎌田 正 夫

わたのふね蜂の巢なして沈みけむ

さしあてゝうつ玉のしけさに

千葉 胤 明

啼きさけふ聲きくはかり近つきて

うちくたきけむ敵のふなはた

遠山 英 一

船の名の其あかつきもまたすして



やみの夜うちや烈しかりけん

加藤義清

船の名のあかつきかけて水けふり

たちまちあくるかちどきの聲

三月十日旅順攻撃の後敵艦のあり

さまをおもひやりて

男爵 千家尊福

たゝかはむ力もなみにたゝよひて

ふねもこゝろも沈みはてけむ

壊殘敵艦

遠山英一

傾ふきて浮ふを見ればなかくくに

沈みしよりもあはれなりけり

南澤機關少監の功をおもひて

宮川甫

あらわしを打しいさをに鷄の羽の

かゝやくしるし賜はりにけん

名譽の負傷水兵某の記事をよみて

伊達正子

弾きすの癒えなはまたも船いくさ

出てむといひてうせし悲しさ

柳田秀子

仇のふね沈むときゝしますら雄か

いまはのきはも嬉しかりけむ



戦ひに臨み機關部にありて砲の音を  
のみ聞きて戦況を見るをえさりしを  
恨みて

谷田志摩生

飛ひちかふ砲の音のみうち聞きて

いくさの様を見ぬそかなしき

日韓協商

綿田勇之進

から草も大和のかせになひきゝて

やかて共にや世にかをるらん

村田弘之

さしのほる日影仰きてからやまの

雪もおほかた解けはてにけり

伊藤特派大使

萩原巖雄

長閑なる春の日かけにさそはれて

から山まゆもひらけゆくらむ

鎌田正夫

たゝよひし雲はれそめて朝日かけ

てりこそとほれ鶏のはやしに

大口鯛二

から山の雲のうきあしきたまらむ

おほみつかひの言の葉かせに

千葉胤明



きみまちてからのこきしも天皇の

大御こゝろのほとをしるらむ

海防といふことを

檜 崎 庸 輔

きたかせに吹あらし來る仇なみを

ふせくはやすし君かみいつに

小 出 五 榮

仇波もきみかみいつにふせく世は

いとまあるらん伊勢のかみ風

制海權

三 橋 中 雄

仇なみを右にひたりにうちしつめ

わたり安くも世はなりにけり

小 暮 宗 敏

至る所かちにかちつるすめくにの

み船によするわたなみもなし



### ● 第五回旅順攻撃

三月廿四日東郷聯合艦隊司令長官報告

聯合艦隊は豫定の如く行動し兩驅逐隊は二十一日夜より二十二日未明迄旅順口港外にありて與へたる任務を遂行せり此間多少敵の砲火を被りしも別に損傷なし又本隊及び巡洋艦隊は二十二日午前八時旅順口沖に達し其一部を鳩灣の方面に遣し富士八島をして港内に對し間接射撃を行はしめたり此砲撃中敵艦は漸次に港外に出で來り午後二時過ぎ間接射撃を止むる頃其數戰艦五隻巡洋艦四隻驅逐艦十隻となれり敵は始終砲臺下に運動し我を誘致せんとするものと認めたり又敵艦よりも間接射撃をなしたるものゝ如く特に富士の附近に着弾多かりしが一も損傷な







露ははかなくきえうせにけり

清水方涯

すめらきのみはたをしき軍ふね

むかふうみにはたつ波もなし

梶田正平

和田津海もくぬかも共に打勝ちて

とよめきわたる勝ときのこと

南耕信

仇の艦うちしつめたるかちときは

四方の海にもなりひくくらん

小金井喜美子

いさ子ともとく掲げすや日の御旗

みいくさ艦は勝ちぬといふ也

深谷勇

大筒のひしきのなたを打ちこえて

けふも勝しときかぬ日そなき

海戦

仲尾次政雅

敵みかたうつ大つゝのひしきには

龍のみやこもうこくなるらん

海軍

小橋川昭裕

むかふたひ勝をしめたるいくさ船

みいついやますときはこの時



北原清一郎

日の御旗かゝけてむかふ船いくさ

浪もろともにあくるかちどき

攔岸敵艦

大口鯛二

いくさ艦こゝろ浅瀬にのりすて

敵ははちともおもはさるらむ

探海燈

千葉胤明

わたつみのそこまで照らす燈火に

しのひてよせむ仇なみもなし

陸軍を護送する海軍の任務をさゝて

伊達正子

いくさ人のせたる艦をまもりつゝ

行くほといかに危ふかるらむ

大口鯛二

千よろつのつはもの乗せて行船を

守りゆく艦のつとめあもしも

海戦の捷報を聞ける日陸軍の某を送

りて

丸山正彦

海原はやもわか手におちにけり

ゆけやものゝふ陸路なひかせ

下瀬博士



伊勢齋助

仇のふねうちしつめたる玉くすり  
君かいさを、見するなりけり

下瀬火薬の應用

矢島久米藏

たくひなききはけしき玉にあら驚の

羽うちごめよあはれますら雄

薦田信次郎

たくひなきき、めありてふ丸薬

つくりし人のほまれのみかは

●第一回旅順閉塞

三月二十九日東郷聯合艦隊司令長官報告

聯合艦隊は去廿六日再び旅順口に向ひ同廿七日午前三時三十分敵港閉塞を執行せり四隻の閉塞隊は驅逐隊及水雷艇隊掩護の下に旅順口港外に達し敵の探海燈の照射を冒して港口に直進し約二海里に達する頃敵の發見する所となり兩岸の要塞及哨艇より猛烈なる砲火を受けしも之に屈せず四隻相次で港口水道に闖入し第一の千代丸は黄金山の西側に於て海岸より約半鏈の處に投錨爆沈し第二の福井丸は千代丸の左側を過ぎて少しく前方に進み投錨せんとするとき敵驅逐艦よりの魚形水雷一發命中し次で其の位地に爆發沈没し第三の彌彦丸も福井丸の左側に出で



投錨爆沈せり第四の米山丸は稍や後れて港口に達し敵の一驅逐艦の艦尾と衝突しながら既に沈没せる千代丸と福井丸との間を通過し水道の中央に投錨せしとき敵の魚形水雷一發を受け爆裂し惰力の爲め左岸に近く船首を左にして横に沈没せり敵の猛烈なる砲火の下に於て斯の如く閉塞員が勇敢沈着其任務を遂行したるは事業として間然する所なく誠に賞賛するに餘りあり唯遺憾なるは彌彦丸と米山丸との間に尙ほ空隙を存し完全に通路を閉塞する得ざりし一事なりとす此壯烈なる閉塞の再舉は前回之れに従事したる勇士の切願を容れ將校及び機關士は主として前回の者をして之れに任せしめ下士以下のみは新志願者を以て交代せしめたり閉塞隊員中戦死中佐廣瀬武夫、兵

曹長杉野孫七外下士卒二名重傷中尉島田初藏輕傷大尉正木義太、大機關士栗田富太郎外下士卒六名にして其他は悉く無事我が水雷艇隊驅逐隊に收容されたり戦死者中福井丸の廣瀬中佐及び杉野兵曹長の最後は頗る壯烈にして同船の投錨せんとするや杉野兵曹長は爆發樂に點火する爲船艙に下りし時敵の魚形水雷命中したるを以て遂に戦死せる者の如く廣瀬中佐は乗員を端舟に乘移らしめ杉野兵曹長の見當らざる爲め自ら三たび船内を搜索したるも船體漸次に沈没海水上甲板に達せるを以て止むを得ず端舟に下り本船を離れ敵彈の下に退却せる際一巨彈中佐の頭部を撃ち中佐の體は一片の肉塊を艇内に残して海中に墜落したるものなり中佐は平時に於ても常に軍人の龜鑑



たるのみならず其の最後に於ても萬世不滅の好鑑を殘せるものと謂つべし

閉塞隊員の掩護收容に就ては直接其任に當りし水雷艇隊最も其力を盡し天明過ぐるまで敵の砲火に曝露して其任務を遂行せり就中蒼鷹、燕の二艇は閉塞船隊を護衛して港口より約一海里に達し敵の驅逐艦一隻と會戦し多大の損害を加へ敵は汽罐を破壊されたるものゝ如く盛んに蒸氣を吹かしつゝ退却せり閉塞隊の端舟が港外に退却するとき目撃する所によれば敵艦と認むべきもの黄金山下に於て全く進退自由を失ひたるものゝ如くなりしと我水雷艇隊驅逐隊は天明過ぐる迄熾なる敵の砲火を蒙りしに拘らず寸毫も損傷なし閉塞隊員の收容は千代丸及彌彦丸の乗

員は燕に米山丸乗員は端舟三隻に分乘して鵠、雁に收容され福井丸の乗員は霞に收容されたり

備考 閉塞隊を掩護したる驅逐隊及水雷艇隊は左の如し

### 驅逐隊

白雲、霞、朝潮、曉、雷、曙、隴、電、薄雲、漣、東雲

### 水雷艇隊

雁、蒼鷹、鵠、燕、鵠、眞鶴



廣瀬中佐の葬儀を送りて

子爵 田中 光顯

和田の原うつあた浪にくたかれて

かへらぬ君をおくるけふかな

男爵 高崎 正風

かくはしき魂のゆくへや慕ふらん

ひつきの上にちるさくらかな

鍋島 榮子

いくさ神と仰くものから悔しくも

惜きはさみかかはねなりけり

廣瀬中佐の歌に 天皇の御聲か  
し 武士のなにかたるへき功なくして



とあるを思ひて

男爵 千家尊福

かたるへき功なしてふことの葉は

いさをと共にかたりつかはや

廣瀬中佐の遺肉を新橋停車場にむか

へて

一ひらの肉をむかへてあめつちに

みつるいさを、忍ふけふかな

もろ人のそてまでしほる春さめは

雲の上よりふるにそありける

廣瀬中佐か戦死の報をきゝて悼惜の

あまりに

下田歌子

沖つ波たちかへらすはとはかりに

め、しくきみを惜む今日かな

白波のたまどくたけしますらをか

かはねたに社得まくほしけれ

同じ君の柩を拜みて

時しもあれさをふ嵐にあらそひて

散るさくらにもたくふ君かな

廣瀬中佐

男爵 高崎正風

七かへり生れかはりてくにのわた

うたてはやまし大和たましひ



君かためつくすこゝろを頼もしき  
侯爵 鍋島直大

船もその身もうみにしつめて

子爵 黒田清綱

三たひまで友を尋ねてみかくれし

いさをはくちしよろつ代迄も

海軍少將 山内萬壽治

敷島のやまとしまねのはなさかり

ちるをうらやむ人こゝろかな

千種任子

ひきつれし友をいかにと三度まで

尋ぬるひまに身はくたけゝむ

小倉文子

あはれ身はなみの藻屑と成ぬれど

いくさの神とあふかれにけり

小池道子

海中に身はしつみてもあたふねを

くたかさらめや君かまこゝろ

北島いと子

くり返しをしまるゝかな廣さよに

かみといはれしこのいくさ人

吉田銚子

三度まで友をたつねしまこゝろは

わたのそこより深くそ有ける



中 邨 秋 香

くたけちるたまの響はあめつちを

ゆするほまれとなりにける哉

御歌所参候

植 松 有 經

つきくにいさを立つらむ軍ひと

いくさの神のあとをしたひて

學習院教授

北 里 闌

ふところに納めし父のうつしゑは

死にて後まてはなたさりけん

鎌 田 正 夫

あた浪に身はくたけても大みふね

なほまもるらむ君かたましひ

大 口 鯛 二

三たひまてともをたつねし真心や

いくさの神のみたまなるらむ

千 葉 胤 明

たふれての後になけきを残さしと

君はつまたにむかへさりけむ

遠 山 英 一

天かけるたまもうれしと思ふらむ

いくさの神とひとにいはれて

加 藤 義 清

萬代のいくさのかみときみなりて

守りますすらんわたのはらから



須川信行

しゝむらの唯一ひらをあますまで

身を碎きけんますらたけをは

松波遊山

かたりつきいひつきゆかむ三度迄

友をたつねしきみかまことは

原六郎

いさましきその討死はますらをの

かゝみとなりて世をや照さん

井上通泰

しつみゆく船に三度もたちかへり

友をたつねしまこゝろあはれ

南郷柳子

きみか死を聞くわかむねも大砲に

打ちくたかれし心地してけり

小暮宗敏

のこしつるその肉むらも躍るらん

いくさの神とまつらるゝ身は

毛利歳雄

軍人のかゝみとなりてあまかけり

たまや御國をまもりますらん

寺田秀幸

あらうみの底に沈めどものゝふの

こゝろのたまそよのかゝみなる



宇都宮信亮

天地のひらけしときゆ聞かさりき

かくもめてたきうまし武夫は

中山幸子

しきしまのやまと心のさくらはな

ちりてのゝちもかくはしき哉

元岡千代子

ひたすらに御國を思ふこゝろには

身のあやふさも忘れはてけん

土田道一

ふねと共に身は沈みても日の本の

ますら武夫の名をそなかせる

辭世

海軍兵曹長

杉野孫七

國の爲十とせのむかし死する身は

今日ありしとは思はさりけり

杉野兵曹長

千葉胤明

友千鳥みたひかへりて呼ふこゑも

ふなそこまては聞えさりけむ

征露の歌

侯爵

鍋島直大

ウオルガの水の澄むまもなき迄に

あたきりすてゝ血汐なかさむ



男爵 石河 光熙

くもりなき日影匂へりしへりやの

あらの、露はいまそけぬへき

折にふれて

文学博士 村正 辭

陸にては勝得へしとてほこりつゝ

空たのめするこにきしあはれ

雪夜思戦地

千代 胤 明

雪をふみこほりを碎きすゝむらむ

いくさ思へは寝られさりけり

加藤 義 清

夜もすからいくさの場を思ふかな

はるなほ寒くつもるみゆきに

をりにふれたる

土田 道一

すゝみゆく我日の本の御ひかりに

うらるの山のゆきもきゆらん

小金井 喜美子

われからにおこしゝ軍いまさらに

敵もくやしとおもひしるらん

三輪 政 平

もろこしの野山をあらすあら鷺を

いどりて來たれますすらをの友



植松延恭

さしのほる我が日の本の旗かせに

鷺のつはさもつかれはつらん

渡邊敏謙

道しらぬ仇のしめたるこかねやま

うかへる雲のたくひなりけり

三浦義道

海に陸に荒ふるわしを狩りとりて

にへたてまつれやまと大丈夫

中川新七郎

老ぬれといくさに出しこゝろもて

たゆまず神にちかちをこそ祈れ

稻垣了齋

海に陸にあたふせく人ありてこそ

まくらも高くふすへかりけれ

今野常太郎

天地につらぬくものは日のもとの

みいくさ人のまことなりけり

野營

松平健子

ひきまはすとはり一重を城にして

とらふす野邊によをあかす覽

草間幸子

雪ふかきこまのに宿るますらをか



いふきそ白き夜やふけぬらむ  
塞上曲

下田歌子

いくさひと水かふ駒のたつかみに

ちる雪さむしはるはたてとも

寒夜哨兵といふ事を

雪をかむ駒のいふきもこほる夜の

たむろか岡にたつひとやたれ

陸兵進撃

長谷場純孝

西比利亞のかたき氷もおのつから

てらす朝日につゆと消えなん

陸戦の勝報を待ち侘ひて

中野徳三郎

うみははやわか物となる勝いくさ

陸のたよりのまたれけるかな

従軍を志願し下命を待ち侘ひて

日野恒次郎

御軍につかへんものどみそきして

春の日なかくまちわふるかな

平壤に於て哥薩克騎兵を撃退せしを

岡崎常磐

こまなへてどりの林にうつつゝの

おとに逃げゝむ鷺のひとむれ



安州の役に田所騎兵の戦死をきゝて

子爵 長岡護美

身は高麗の雪と消てもかくはしき

名は日の本のはなどころさけ

征露の歌の中に

權掌侍 津守好子

大きみの大みこゝろをやすめんど

いさみてすゝむますらをの友

松井保

八百よろつ神の守れる御いくさの

むかふかたには仇なかりけり

林慶確

西伯利亞におひしけりたる醜草を

刈てつくさんやまどかたなに

田島等

野に山におき渡したるしらつゆは

のほる朝日にやかて消ゆらん

細田一雲

さしのほる朝日の影にもろこしの

野へにむすひし露をきえゆく

中田慈苑

つゆ草のしけると見しは日の御影

てらさぬさきのこゝろなり梟

鳥海宗之助



老ぬるか口をしきかなみいくさに

たてまつるへき身は持なから

八本義功

家も身もかへりみすして大きみの

大みこゝろをやすめまつらん

和合庄吉

日の御はた立て、野山を蹈行かは

もろくも消えんつゆのあた國

石井祇一

しらすしてはひこりぬらん露草は

その草なきのつるきありとも

征露軍

植松有經

神もいかてたすけさるへき大和人

いのちを捨ていてやと向は、

岩瀬眞砂

皇國のますらたけをはどつくにの

醜のあらしきもとりひしきけり

光田文次郎

天津日の御旗のかせにしへりやの

野邊のしこ草なひきふしけん

小川泰藏

皇軍はうみにくぬかにたゝかへは

かならす勝つを嬉しかりける



岡田水江

日の本のはたての風にみたれては

やかてきゆらむしこくさの露

眞野好文

さし出るあさ日の御旗もろこしの

野にも山にもかゝやきにけり

敵國降伏軍人安全の祈禱祭に

大矢弓吾

たゝかへはかならすかてる御軍の

かちをば神になほいのるかな

皇軍の名譽を思ひて

中野徳三郎

たゝかひは正しき名もて開かれし

大御いくさの御威稜たけしも

言志

陸軍少將 伊崎良熙

骨も身も碎きつくしておほきみの

ふかきめくみに報いまつらん

征露中のうた

歩兵一等卒 木暮市三郎

大きみのみいつかゝやく旗かせに

しこの荒わし狩りはらひてん



●定州占領

三月廿八日午前十一時十五分定州南門外に於て騎兵隊の將校斥候敵に遭遇し該隊及び歩兵の一部は之を收容し結局此敵を撃退して定州を占領し陛下の萬歳を唱へ士氣極めて旺盛なり

將校斥候は定州南門附近に在る敵の射撃を受け北方に避け騎兵の主力之を收容する爲め全力を盡して射撃す午後一時十五分歩兵は急行して定州東北約二千米突の地に來りて射撃するや敵は義州街道郭山街道を退却し我歩騎兵の一部は之を追撃す敵の兵力は約六百なり







しへりあの草葉の露ものるこまの

ひつめにかけて進めつはもの

我斥候兵の勇猛を

古瀬惟光

た、三騎ものみに出しものゝふに

あまたの仇はおはれけるかな

陸戦の捷報ありしとき

高倉壽子

かちどきの聲とともに日の御旗

ひかりそふらん時はきにけり

小池道子

いち早きこのかちどきを聞しめす

御こゝろいかにおはします覽

吉田鉦子

いさましき軍のかちをきくことに

嬉しなみたそまつこほれける

征露陸軍第一戦勝の報をさゝて

宮地嚴夫

御軍はうみにのみかはくぬかにも

又うちかちてすゝみそめけり

藤崎虎二

おもひきや露てふ國の名はあれど

かく迄もろく消えんものとは

富澤政恕



唐土のはらに羽をのすあらわしを

うちはらひませ火具槌のかみ

長岡騎兵少尉の武勇を

侯爵 鍋島直大

ものゝふの家に生れしかひありて

稀なるいさをあらはしにけり

同少尉の父長岡子爵に

獨子の得たるほまれはよろつ世も

うこかぬ家のほまれなりけり

鍋島茂子

僅なる日かすのうちうれしくも

きゝてけるかな君かほまれを

鍋島信子

さきたちし陸のいくさに手負ても

ほまれをあけし君そうれしき

實弟長岡騎兵少尉の負傷を聞きて

在佛國 公爵夫人 巴里 一條悦子

外國にあるひとまてもたへけり

君かいくさにたてしいさをは

細川護全君の奮戦をきゝて

宮川甫

細川のなみくならぬかみつ瀬の

きよきその名は劣らさらめや

吾か子騎兵少尉護全が定州の戦に負



傷しつとき、けるをり

侯爵北堂

細川宏子

いちはやくいくさす、みて定州に

かちうたあけし名こそ高けれ

た、かひのかちときあけし其折の

こゝろやいかに嬉しかりけん

御軍のかすにいりにしかひありて

わかおほ君につくすうれしさ

鍋島騎兵大尉に送る

松平健子

勝ほこるこゝろの手綱ひきしめて

駒のあしとくすゝめよやさみ

日露の地圖を見て

文學博士

木村正辭

かたちのみ大きかりとも何かせん

くちらは鯨にころさるといふ

千葉胤明

今日はこゝあすは彼處と標しつゝ

大御いくさのすゝむをそまつ

加藤義清

筆とりてしるしをつけぬ日の御旗

やかたつへきわたの野山に

時事有感

東宮侍講

本居豊穎



國の爲しぬとさためてのちにこそ

いくさは強きならひなりけれ

おもひえてしるやしらすや皇軍は

かみの助けのなき世ならぬを

小出 榮

御軍のかちてかふとの緒をかたく

むすはんをりを今よりそ待つ

佐々木 信綱

いたつらに人を屠らむ太刀ならず

正義のためにふるふへき太刀

雨 森 巖

秘めおきし父か遺物のつるき太刀

磨きすますへき時は來にけり

青 砥 環

おほえある太刀ふりかさし残なく

なきたふしてんしこのつゆ草

海軍少將 肝 付 兼 行

梓ゆみはるは來にけり高麗越えて

もろとしあらす驚射留めはや

陸軍少將 中 村 覺

こゝかしこ花は咲けとも匂へども

見る人もなく散らんとすらん

ものゝふの心のはなと見るへきは

やまとさくらの外なかりけり



しきしまのやまと心もかくこそと

風にまかせてちるさくらかな

男爵 藤枝雅之

すゝみ行みいくさ人をおもひつゝ

はなもわすれてくらす春かな

権典侍 園祥子

大君のみいつとともにものゝふの

こゝろの花もにほふはるかな

みいくさのかちどきいはふ國人の

聲ひゝくなりくものうへまで

前田朗子

國のためこゝろみかきてさくら花

ちるへき時にちるへかりけり

彼岸の中日に

小池道子

足乳根の親よりさきにみいくさの

みちにたふれし魂まつるなり

また折にふれて

しきしまの大和こゝろの花さくら

くにてふ國にかをりゆくらん

命婦 生源寺伊佐雄

大君のみけしのそてにかをるらん

やまとこゝろの花さくらはな

鎌田正夫



花見んといふ人もなしみいくさの

勝をよろこぶこゑはかりして

中 郵 秋 香

さしのほる朝日の花のかけしめて

わか勝いくさいはふけふかな

おくつきにしきみ手向る手弱女か

くろかみさむく夕かせのふく

手 塚 秀 輔

やかて今露のしこくさかりつくし

大和なてしこうゑてなかめん

外 山 旦 正

おほみ軍かちつゝきけり花かけに

けふもとよめるよろつよの聲

吉 田 儀 作

大やまと雄々しき魂はこかねにも

まさる御國のたからなりけり

田 所 慶 次

しへりあの山もかすみて今年より

長閑なるらむ御代のひかりに

菊 地 千 重 子

虎ほゆるうらるのいはら刈り盡し

わか日の本のさくらさかせん

平 岩 日 基

太刀風になひく野原のもゝちくさ



太氏思ふもしとろもどろに露やちるらん

鹽原熊次郎

くれなるに春の草葉をそめなして

すゝみゆきけり大和ますら男

吾聯隊旗に大鷲の來り留りぬと聞て

文學博士 村正 辭

かなはしとおもひさためて大鷲も

御旗をさしておちくたりけん

花の頃折にふれて

鍋島信子

いくさ人雪ふみわくるきのふけふ

花見ありきもこゝろなきかな

尾崎吉從

つは菜つむしつか童もたけかきを

抜てかさしていくさことする

花下戦捷を祝す

藤田とも子

咲匂ふさくらのもとにまど居して

大みいくさをいはふ今日かな

鈴木吉太郎

勝ちつゝく大みいくさを祝ひつゝ

花の木かけにうたけするかな

をりにふれて

陸軍少將 岡 默



仇はらふ事にこゝろのいそがれて

百九十二

ことしの春はあたにすこしつ

劍はきつはものひきておほきみの

みかきものする時は來にけり

君の爲つはものひきてすめくにの

つるきのひかり敵にしめさん

近衛歩兵軍曹

高岡 四作

唐土のどら伏す野邊にしきしまの

やまどこゝろの花さきにけり

ふるさとの母はいかにと思ふかな

いと、身に浸むしへりあの風

### ●我艦隊の大成功

(四月十六日東郷聯合艦隊司令長官報告)

聯合艦隊は四月十一日より豫定の如く行動し更に旅順口の敵に對して第八次の攻撃を爲せり第四驅逐隊第五驅逐隊第十四水雷艇隊及び蛟龍丸は十二日夜半旅順口港外に至り敵の探照を冒して港口に近づき計畫の通り港外の各所に機械水雷の迅速なる沈置を遂行し得たり又特別の任務を有せる第二驅逐隊は十三日黎明港外鮮生角の南東を巡邏せる時東方より旅順口に入らんとする四本煙突を有する敵の驅逐艦一隻を發見し直に其前路を遮りて之を攻撃し約十分間戦闘の後之を撃沈せり又同時頃西方老鐵山の方より來れる他の敵驅逐艦一隻を發見し轉じて之を

百九十三



攻撃せしが距離遠くして遂に之を港口に逸せり此戦闘に於ける第二駆逐隊の損傷は輕微にして唯電の卒二名輕傷せるのみ撃沈せる敵艦の溺者は敵艦バヤーンの近づき來りしたため之を救助するの暇なかりし

第三戦隊は午前八時港外に達して第二駆逐隊を掩護し且つ敵情を偵察せり午前九時頃敵艦バヤーン我に向ひ突進し來り遠距離より砲撃を開始せしを以て徐々に應戦して之を撃退せり幾もなく敵艦ノイヴヰツク、アスコルド、デイアナ、ペトロパウロウスク、ボベード、ポルターワ等バヤーンと合し攻勢を取りて反撃し來り第三戦隊は之に應戦しつゝ敵を南東方向約十五海里に誘致せり此時沖合約卅海里に方りて濛氣の内に隠れたる第一戦隊は第三戦隊の無線

電信に接し直ちに急進して敵艦隊に逼りしが敵は艦首を轉じて港口に向ひ背進せしを以て尙益々追窮して之を港前に壓迫せるとき先頭に占位せるペトロパウロウスクと見えたる敵艦一隻前夜沈置したる我機械水雷に掛り爆發轟沈するを見る時に午前十時三十二分なり敵の殘艦は此慘憺たる光景に驚きて大に混亂し尙ほ外に一敵艦の進退自由を失ひたるの疑ひありしも敵艦隊混雜の爲め其艦型を識別する能はざりし其後敷の殘艦は約一時間頻りに艦側附近の水面を砲撃しつゝ漸次に港内に入り正午過ぐる頃港外に敵影を見ざるに至れり此戦闘の初期砲戦に於て第三戦隊は一の損傷なく敵の損害も亦少許なるべく第一戦隊は遂に敵と砲弾距離に近かざりし



當日午後一時艦隊は旅順口港外を去り豫定地點に集合して洋中に假泊し更に準備を整へて十四日午後四時より再び旅順口に向ひ發動せり第二驅逐隊、第四驅逐隊、第五驅逐隊、第九水雷艇隊は翌十五日午前三時前後相次で旅順口港外に達し豫定計畫の如く再び其任務を遂行せり午前七時第三戰隊も港外に現はれ敵情を偵察せしが港外に敵影なく港内寂然たり又第一戰隊は午前九時旅順口沖に至り途上浮流せる敵の機械水雷三個を發見し一々之れを砲撃爆沈し午前十時より春日、日進を老鐵山の西方に分派し約二時間港内に對し間接射撃を行はしめたり敵の要塞及港内の敵艦時々之に應戦せしが兩艦共に損傷あらず此兩艦は此日を以て敵に對し其初彈を發射せしが其射撃の効果は

相應に之れありしが如く老鐵山西の新造砲臺も沈黙せしめたり午後一時三十分艦隊は交戦を止め歸航せり此連続せる作戦に於て聯合艦隊が一兵をも失はずして多少の戦果を擧げ得たるものは一に大元帥陛下の御威徳に依るものにして麾下將卒は終始勇往敢爲其任務を遂行するに忠實なるも其奏功成果に至ては人力の及ばざる所多し特に多數の艦艇が晝夜を問はず敵機械水雷の浮流せる洋中を縦横に航行し然かも今日に至るまで一の危害を受けたることなきが如きは只天佑と確信するの外あらざるなり



四月十三日旅順の大勝利を聞きて

伯爵 佐々木 高行

御軍のかちときうみにひゝくなり

みやこのはなは今さかりにて

日進春日放初弾

阪 正 臣

山こしにとりて碎きてふたふねの

弾の打ち初め先つほまれあり

昨日かもまちむかへつるにひ船も

はやたゝかひに名をあけに鳧

大 口 鯛 二

新艦のはしめてはなつ弾をうけて



仇のつゝくちみなつくみけん

千葉胤明

くろかねの山のとりても壊れけり

はしめて寄する浪のひゝきに

折にふれて

松平健子

仇波のたちさわかすはかくまてに

あらはれましを日本たましひ

龜山新一

荒波のうつまくなみのそこふかく

またしつみゆく敵のおほふね

小泉詠歸

真こゝろをとものにこめたる筒先に

むかはむ敵はあらしとそ思ふ

鹽原熊次郎

この春はわかみいくさの勝どきの

こゑより外にきくものそなき

北條辨旭

仇なから哀れとそ思ふたゝかひて

まくれはとでもあまり脆さに

中村忠康

戦へはかならす勝ちて日の御はた

かゝけていはふ時はきにけり

櫻井兼香



渤海にさかまくなみをやふりつゝ

しつかにかへる御いくさの船

敵將マカロフの戦死を吊ふ

阪正臣

日の本の國の御稜威をわたつ海の

そこに知らん君かあはれさ

大口鯛二

ことならば負けなんまでも一戦

すへかりしをどくやしかり劍

千葉胤明

艦なから沈むはかなさたゝかひの

みちの奥かも知るひとにして

加藤義清

仇なれと君かなきから手に入らは

花も手向けんみつもすゝめん

伊藤新

仇なからをゝしかりしはしら旗を

かゝけさりけるこゝろなり梟

矢部典則

かけるへき力もいまはなかるらん

わしの片羽はまつをれにけり

中川新七郎

中々にかげんと思ひしわなにさへ

おのれかゝりてしつむ憐れさ



山田啓太郎

強者の名をえしくにのまかるふも

朝日のもとのつゆどこそちれ

折にふれて

姉 小路 良子

つゝゆみのひゝきと共に日の本の

ほまれもたかき世となりにけり

藻屑とも身はならはなれ君かため

このあた波をくたかさらめや

小池 道子

もゝ千たひとりてそみつる御軍の

かちをつけたる文のひとひら

あいか身も力をこめてひたすらに

神のまもりをねかひけるかな

権命婦 平田 三枝

いへも身もかへりみなくて國の爲

つくすまことは神そもるらん

前田 漢子

御軍のたゝかふことにかつみれば

ひたすらかみのまもります覽

中山 幸子

なにとなくこゝろの駒そ勇むなる

益良夫ならぬをみななれども

兵動 ほき子



おそろしきほつゝまくらに仇波の

よるもねむらしみいくさは

宮澤歌子

露はらふわか日の丸のはたかせに

なひかぬ草はあらしとそ思ふ

高久ひさ子

楯をくたき艦を藻屑になしつれと

なほ吹きそはむ伊勢の神かせ

高橋さた子

神風もうらるのみねに吹きすさひ

八重立くもをはらひますらん

木谷絹江

みいくさに入らさるものと心して

つくさゝらめや大きみのため

我子の軍人ならぬをかなしみて  
大野秀子

しかすかに男はあれとみいくさに

つらならぬこそうらみ也けれ

敵艦又もや我が商船を撃沈めつと聞

きて

北里関

海いくさとても勝ちえぬ怨みをは

あきなひふねに打はらしけん

緒方萬



ふな軍勝ちえかほなるそらことの

たよりやすらんおのか國へに

土方砲兵中尉夫人におくりし消息の  
はしに

海軍中將

柴 山 矢 八

鷺のすむ野山のくまをうちはらひ

あさ日の影に照らせますらを

親戚に寄せたる消息の端に

海軍一等水兵

張 ケ 谷 茂 質

身はたとひ海のもくつと消るとも

にしき飾らむふるさどのはか

奨兵義會

加 藤 義 清

國民のこゝろひとつになるみても

我みいくさのかたてやはある

砲臺守備中作

砲兵少尉

佐 藤 庸 也

備ふれどあたは來らすみやしまの

春のうなはらなみのとかなり

戦死將士の手蹟の新聞紙にをりく

掲載せられしをみて

藤 崎 虎 二

ものゝふのかたみの筆の蹟みれば

運味品かみに聲あるこゝちこそすれ



戦利品をみて

加藤義清

ますら男のいのちに換へし此品は

うれしくもあり悲しくもあり

軍用手票をみて

伊勢齋助

海やまを立へたてゝもたふときは

こかねにかふる手札なりけり

戦時にあたり暴利を貪る商人を

悪みて

星川清民

わらはへも國の爲にとさゝくるを

新聞紙上報國彙報を讀みて

宮島忠三郎

國おもふひとつこゝろの色みえて

豊あきつしまにしける民くさ

征露雜咏

山晃三

さらぬたにはかなき露は天つ日の

さやけき影にきえすやはある

養宇能宣

神風のそよど吹くにもちりぬめり

露を名におふしこのあたくに



小澤幸民

ぬきはなすやまと猛雄の太刀風に

鶯は羽たゝくすへやなからむ

思遠征

伯爵 東久世通禧

雪こほりきゆるをときと哈爾賓の

たむろうち壊せますら雄の友

男爵 高崎正風

歸らしとちかひて出てし益良雄も

なほ家ひとのゆめに見えつゝ

男爵 渡邊清

もろこしの荒野をてらす日の御旗

いかにしこ草いろなかるらむ

三岡鶴子

あさは雪ゆふへは風とあるゝ野に

ますらたけをは勇みたつらむ

室田光子

君のためつゝとりすゝみゆく人の

かはね晒さむ野へはいつくそ

九鬼憲子

ますらをかいのちをすてゝ外國に

いさみてゆくもたゝ君のため

中川貞子

君のためちるを惜まぬますらをか



こゝろの花のかくはしきかな

郷 英 子

きみのため虎ふす野にも攻入りて

あところか露もうたけますらを

岡 澤 米 子

神風のふきおこりなはあらわしも

つはさたゆまむきたの海はら

鍋 島 茂 子

さはへなすわしをとらへて軍ひと

あくるかちとき今よりそまつ

東 郷 弘 子

わかくに命さけしものふは

雪もこほりもいとほさるらむ

宍 戸 幾 子

うき雲をはらひつくせや日の本の

ひかりいたらぬくまもなき迄

池 田 信 子

天つ日のみはたの風にしこくさの

露はみたれて消えんとすらむ

蛭 海 松 代

日の本の朝日のひかりてらしなは

いかなる露かきえてあるへき

山 本 忍 み 子

君のため國のためとていさみたつ



すかたを、しき大和ますらを

秋山 こと子

雪のうちにおふる醜草しけくとも

中村 郁子

さしのほるわか日の本のはた風に

天の日のみもろくみたる、わたし野の露

野津 輝子

明日しらぬ身とも思はて益良雄は

御國のためといさみたつらん

鍋島 信子

あらわしをかりつくしつゝ軍ひと

かへる日數をかそへてまたん

吉田 とき子

日の本の御旗のもとにいさましく

大きほひたつらむますらをの友

阿波 清子

大君のみことかしこみますらをか

すゝむかたには仇なみもなし

大屋 清子

さしのほる朝日にむかふ露なれは

日のまの光やかてそきえん西比利亞の原

岡田 とき子

雪ふかきわたのゝすゑも日の本の



みはたの風やふきとほるらむ

佐々木高子

日のもとの光にあひてことうらに

うきたつ雲もきえやはつらむ

大津とぎき子

のる駒のいふきも氷るあたしのに

いさみてむかふますらをの友

町田とよ子

うちむかふ大和健兒のをたけひに

みたれぬ仇はあらしとそ思ふ

宮島と竹子

日の御旗さゝけてすゝむおほ船に

あたれは玉もつゆとくたけて

山尾西子

草も木もことなる國のしらつゆを

御旗のかせにうちはらふらむ

巨智部金子

ますらをのかさす旭のはたかせに

つはさしをるゝ北のあらわし

吉田寛子

露ふかきから野のうはらかり拂ひ

さくらうゝへき時はきにけり

恩賜義手足

阪正臣



身をすてゝ報いまつらん足のさき

思慕 手のすゑまでもかゝるみめくみ

千 葉 胤 明

なにはえのあしの障りも忘れつゝ

おしいたゝきぬたゝ片手にて

加 藤 義 清

みめくみのかゝる手足に益荒雄は

おもき痛手もうちわするらん

赤十字社

中 郵 秋 香

このわさの心をやかてこゝろにて

いくさなき世となす由もかな

木 村 吉 房

へたてなくこゝろも赤き旗手には

なひかぬ仇もなき世なりけり

歐米婦人來援我赤十字社事業

阪 正 臣

いたて負ふ人救はんとわたつ海の

ふかきは君かこゝろなりけり

加 藤 義 清

天津日の御旗のかせをしたひきて

さらにもかをる花うはらかな

赤十字社篤志看護婦人會

男 爵 千 家 尊 福



布まきにつくすころのひと筋は

いく玉の緒かつなさとむらん

繙帯を造りつゝ

鍋島榮子

君かためうけたるきすは手弱女の

ころをこめし布につゝまむ

鍋島茂子

少女もまなひのひまに布まきて

みいくさ人におくるうれしさ

鍋島信子

すくひたき少女ころをこの布に

まきておくらんみいくさ人に

片山今子

人々のまころこめししらぬのに

玉の緒かたくまきとめてん

貴婦人の繙帯製作を聞きて

千葉胤明

堪かたき痛手もやかて癒えぬへし

なさけこもれる布にまかれて

華族女學校運動會に看護婦のわさあ

りけるをみて

松平健子

少女子のころをこめてぬのまくも

すゝむをしへのひとつなり梟



篤志看護婦

たをやめも御國のために盡すへき 鍋島信子

ときは來にけり此御いくさに

米國篤志看護婦マツキ夫人の來朝  
を迎へて

藤崎虎二

わたり來し海より深き眞こゝろを

皇族各妃殿下の繙帶をいとなませた

まふと聞きて

舞田貞子

ますらははふかき手傷も忘るへし

御なさけこもる布のひとまき

赤十字社に義務奉公を願て許されす

高橋種之

老ぬとも身をくろかねに打なして

せめてむくいむ國の御ために

軍人家族授産婦人會

男爵千家尊福

いくさ人いてつる家のうすけふり

いさをと共にたちまされとや

勿忘の歌七首

子爵中田光顯



ちしほもてわかせめどりし國土を

奪ひさられしうらみわするな

國のため家をも身をもわすれつゝ

たゝかふ人をゆめなわすれそ

真心のわかきしるしのはたどりて

おくりし人のなさけわするな

死に代り生ひかはりても忘るなよ

わかおほ君にむかふかたきを

勝ちしとき兜の緒をはしめよてふ

古ことわさをつねにわするな

幾千度からきめみてもわするなよ

きみか御楯とおもふこゝろを

武士は睨かてあしそこのたまひし

大みさとしをわするなよひと

男 爵 渡 邊 千 秋

朝夕によみてわするなたゝかひを

宣らせ玉ひしおほみことのみ

からやまの吹雪凌きてよもすから

銃どるひとのこゝろわするな

さく花を見ても忘るなあらなみの

うへにちりにし人のいのちを

戦ひにいのちすてにしものゝふの

つま子をめくむこゝろ忘るな

ひとひらの黄金も積みてくいの富



まさむこゝろを常にわするな  
つねのわさいよゝ勵みて忘るなよ

あごをはまもる民のつとめを  
皇軍のかちときあけしそのゝちの

よきはかりこと今もわするな

國母陛下の瑞夢

阪 正 臣

秋の宮のみゆめに入るはまさ夢に

かねて知らるゝかちいくさ哉

千 葉 胤 明

かちいくさ續くもうへな君か世は

世になき臣もつかへまつれり

加 藤 義 清

もれ聞くもかしこかり梟益荒雄を

御夢に立ちしみものかたりを

古戦場

大 口 鯛 二

十年へてまたかこまんと思ひきや

我が攻め取しおなしとりてを

露國負傷兵士日本赤十字社の厚意を

感謝するを聞きて

小 笠 原 長 祥

眞こゝろをうつす十字のはた風に

なひかぬ民はあらしこそ思ふ



出征豫後備軍人

遠山英一

おのくゝに妻子の上やおもふらむ

大御いくさのかすにいれども

軍國農民

大口鯛二

武士にいかて譲らむみいくさの

かてをつゝくる民のいさをは

千葉胤明

ひとり子も馬も軍に出たしやりて

たかへしはけむ老もありけり

戦死者の遺族に

遠山英一

日の本の國のひかりとなる見れば

捨し甲斐あるいのちならすや

戦死者の未亡人を思ひて

安藤とき子

我父のかほもえしらぬみどり子の

おひたつさきをいかにまつ覽

負傷者を思ひて

高倉壽子

傷の跡いゆるもまたてたゝかひに

こゝろやすゝむ大和ますらを

戦死者を吊ふ



高岡直翁

國の爲いのちをすてしますらをの

立てしいさは千代も朽ちせし

出征軍人遺族を扶助せんとて吾村一

同積金するを

松谷庄藏

ふたつなき命さゝけしますらをの

あとなくさむるやまふきの花

出征軍人を思ひて

宮崎島次

雪こほりふみわけすゝむ益良雄は

たゝかふよりもくるしかる覽

白露開戦以來臺灣守備隊中なる我脊

の君を思ひやりて

川口鐘子

みいくさのかちぬと告るたひくゝに

我脊やいかにうてさするらん

出征軍人の家族のこゝろを思やりて

前田朗子

はしらともたのむ我子にわかれ梟

やかても君のためとおもへは

うちいてし我子のうへのおもほえて

ねさめかちにや夜をあかす覽

大口鯛二



いく度か胸さわくらむときならぬ

にひふみうりの鈴のひゝきに

鍋島茂子

残されし妻子のこゝろ如何ならん

いくさの便り待つはかりにて

幡江晁

母のそてに縋りて父のゆくへとふ

子を慰さめにみするいくさ繪

松岡多吉

脊は太刀をはきていてたち妹は歟

出征軍人の妻に代りて

鹽井敦

小夜ころもたち重ねても忍ふかな

仇守るせこやいかにさむきと

大本營

坂正臣

仇は皆あみにいるへしみいくさの

大つなとりてきみしいませは

大口鯛二

はかりこときこしめすらし大前は

いくさの君の今日もつとへる

参謀

坂正臣



たゝかひの庭はふまねと勝ぬへき

みちをちさとの外にしるさむ

●鴨緑江畔の渡河九連城の攻撃

(黒木大將報告)

其 一

四月二十六日正午頃より九連城の砲兵は義州附近を砲撃し近衛歩兵第一聯隊の兵卒一榴霰弾の爲め負傷せり二十七日も亦時々砲撃す我砲兵は應射せず九里島に在りし第二十二聯隊乗馬斥候部隊長少尉セミヨノフの死體を九里島對岸にて發見し義州城内に埋葬せり細谷艦隊より差遣したる宇治、摩耶の二砲艦、二水雷艇、二武装蒸汽船は中川海軍中佐の指揮の下に二十五日夕龍巖浦に入港せり其際宇治は安子山より敵の砲射を受けたり廿六日の朝水雷艇一、蒸汽艇一は水深測量の爲め娘々城附近に進航せり艦隊



は午後五時より同五十分まで安山子の敵と對戦し敵砲を沈黙せしむ又其附近を通行する數百騎を砲射せり海軍は損傷なし

## 其二

架橋準備を爲すの必要上軍は廿六日朝威力を以て即ち近衛師團の一部を以て九里島の敵を撃退して之を占領し第二師團の一部を以て黔定島を占領せり敵は悉く九連城方面に敗退せり此戦闘に依り我死傷者近衛師團戰死(一字不明)重傷九、輕傷十六名第二師團死傷無し又敵は少なからざる死傷者を運搬し去るを見たり但し我衛生隊に收容したる敵の重傷者(乘馬斥候兵)一は東部西比利亞狙撃歩兵第十二聯隊の者にして同人の言に依れば同第二十三第二十

四聯隊も亦前面に在り其長官は少將ツルメフにして各聯隊は二大隊より成り乘馬斥候兵百四十二を有す敵は九連城後方高地に在る砲兵八門(九珊半)を以て西湖洞附近を射撃せり又虎山の高地にホツチキス機關砲二門を顯はせり元化洞高地に在りし我砲兵一中隊は虎山の高地に顯はれたる敵の高等司令部らしき者に對し三回の齊射を行ひしのみ

## 其三

敵は鬩河右岸に沿ひ九連城以北に工事を繼續しつゝあり二十八日も亦時々砲射しつゝあり二十六日九里島前岸に於て斃れたる敵の馬匹九十五頭外に生馬六頭を得たり

## 其四



昨二十八日近衛第四聯隊の二中隊は偵察の爲め虎山に至り更に一小隊を栗子園に派遣す敵約三十同村の南端を防禦す我兵之を撃退す敵は死者五名を殘せり其隊號は狙撃歩兵第二十二聯隊なり其時敵は榆樹溝東南端高地の砲臺より砲撃を初む我に損害なし九連城附近の敵の砲兵は時々大角度の射撃を行ひ其彈丸は九里島義州西湖洞弘北洞西方附近に落下し我攻撃準備作業を妨害し夜間と雖も時々發砲す然れども其効力は概して微弱なるものゝ如く我に損害なし本日も時々義州城内を砲撃す我は應射せず第十二師團は水口鎮の前岸に在りし微弱の敵を撃攘し今二十九日午後二時架橋を開始す

## 其五

一、第十二師團は今朝午前三時水口鎮に於ける架橋完成續いて渡河午後六時豫定の陣地に着く  
 二、野戰砲兵第二聯隊及重砲兵聯隊は未明迄に豫定の陣地に着午前十時四十分黔定島より中江臺に出したる我歩兵斥候に對し九連城北方及び東方高地に在る敵の砲兵之に向つて射撃したるを端緒として猛烈なる砲戰を開けり午前十一時十五分九連城の敵砲兵は沈黙馬溝東方の高地に在る敵の砲兵約八門は九里島西方の架橋に向ひ射撃を續行せり我義州東方に附置せる近衛砲兵之に應ず約十分の後馬溝東方の敵砲兵亦沈黙す午後零時半兩方面の敵砲兵再び射撃を開始せしも我射撃の爲め一時廿分頃再び沈黙せり我砲撃の結果敵に充分なる損害を與へたるものと認



一、我軍の損害は輕傷將校五、下士以下即死二、負傷廿二なり  
 二、鴨綠江本流の架橋は午後八時完成し諸隊は續々虎山北  
 三、方の高地に前進す  
 四、細谷艦隊の支隊は安東縣の下流に於て戰鬪に參與し就  
 中裝砲汽艇は敵の砲兵及び歩騎兵と最も激烈なる戰鬪を  
 爲し歩騎兵約四百を撃退せり  
 五、軍は豫定の如く明一日未明攻撃を實行せんとす  
 六、敵の砲兵は發射速度大にして其曳火線は確實に七千五  
 百メートル以上に達す

鴨綠江南既に敵なしとききて

坂 正 臣

こま野にはたつしこ草の影もなし

御稜威の風やいかにするとき

神くにむかへはよわし向ふかた

あたなき仇のいくさなれとも

鴨綠江の船橋架設

男 爵 千 家 尊 福

ありなれの川こそあせめ舟はしの

なかくつきぬはいさをなり是

敵前架橋

坂 正 臣



いのちをもかくるなりけり御軍か

あたうちわたす河のふなはし

遠山英一

あたなみの折々よせてありなれの

川のかりはしかけなやみけん

鴨緑江附近の勝利をきゝて

宮島忠三郎

ますらをか命をかけしうきはしに

くちぬほまれはありなれの河

矢田部興市

くれなるの波やたちけん鴨の羽の

みどりの川のいくさはけしも

陸戦のことをおもひやりて

文學博士 木村正辭

日の御旗靡くひかりに消え果てむ

しへりやか原のくさの上の露

陸戦

高田文太郎

やき鎌のと鎌にかけて西比利亚の

しこ草からんますらをのとも

皇軍進撃

山口道賀

ますらをはとく刈拂へところせく

から野にしけるしこのつゆ草



細川宏子

益荒雄か勇みすゝんてたゝかふも

みなおほ君の御稜威なりけり

大君のみことかしこみひとすちに

みくにゝつくすますらをの友

きみかため身は海中にしつむまで

たゝかふ人のたのもしきかな

今よりはしへりやの野も春ことに

ささやにははむ大和なてしこ

武夫もしへりやの野にほことりて

さむき今宵のつきをみるらん

國のため身を返りみぬますらをの

こゝろにまさるたからなき哉

朝日影にほふかたより消えそめて

むすふかひなし草の上のつゆ

侯爵北堂 池田幸子

ますらをかこまのわかきに醜草を

ふみなひけつゝいや進むらん

草も木もなひきふすらん天つ日の

ひかりかゝやく國のみいつに

池田亨子

御軍のむかふどころのあたはみな

君かみはたになひきふすらん

君のため國のためとてますらををか



たてしいさをは千代も朽せし

池田 巖子

あたなせるとつ國うちて大きみの

みいつは四方にかゝやきに梟

いくとしのうらみかさなる外國を

うちこらすへき時はきにけり

池田 住子

あまてらす我日の本のひかりには

さもこそきえめつゆのくに人

あら驚のはかひことごと折つへし

山さけとほるつゝのひゝきに

### ●安東縣九連城一帯占領

(黒木大將報告)

敵は九連城西北高地に於て再抵抗を試しも五月一日午後一時五十分より退却を始め軍の右翼隊(第十二師團)は大樓房中央隊(近衛師團)は蛤蟆塘左翼隊(第二師團)は安東縣に向ひ又軍の總豫備隊は遼陽街道を前進し午後六時軍は安東縣より老古溝を経て梨樹溝に亘る線を占領し特に蛤蟆塘附近にて三面より敵を包圍し激烈なる戦闘の後砲二十門馬匹車輛共悉皆將校二十餘名下士卒多數を捕虜とせり我に對せし敵は狙撃歩兵三師團の全部及び同第六師團の第二十二第二十四聯隊とミシチエンコの騎兵旅團砲約四



十門機關砲八門にして鳳凰城方面に背走せり我軍の死傷  
將校以下七百ならん目下取調中

戦利品は速射砲二十八門小銃及び彈藥等多數なり我砲兵  
の効力は頗る偉大にして捕虜將校の言に依れば昨今兩日  
の砲戦に於て敵の軍團長ザスリツヂ師團長カシタリンス  
キーは共に負傷し其他捕虜騎兵中佐の言に依れば敵の死  
傷は八百以上なりと云ふ

摩耶艦隊は午前十時より安東縣下流に至り敵の砲兵と約  
三十五分激戦の後之を退却せしめ午後二時龍巖浦に歸れ  
り

當軍司令部は午後五時三十分九連城に至る 殿下以下各  
將校極めて元氣軍隊の士氣大に振ふ

以上取敢へず報告す

## 其二

昨一日午後敵は我追撃に對し頗る勇敢の抵抗を爲し爲め  
に我軍の死傷は更に三百を加へたり又此敵は最終の時期  
に至る迄奮戦し其砲兵約二中隊は人馬の大半を失ひ遂に  
閉鎖機の要部を破壊し白旗を掲げ降服せり

捕虜將校の確言に據れば蛤蟆塘附近の戦鬪に於て師團長  
カシタリンスキー及狙撃歩兵第十一第十二聯隊長狙撃砲  
兵大隊長は戦死し其他高級將校に死傷者多し敵は數回の  
打撃に依りて全く潰亂して退却せしものゝ如く昨夜來各  
所に遁竄し在りたる敵の投降するもの多く捕虜の總數今  
や將校ロウエフフギー中佐以下約三十内健康者十下士以



下約三百内健康者二百其詳細及び我軍死傷者の姓名確報  
は取調中

蛤蟆塘の追撃

大口 鯛 二

しかはねの多きを見ても仇なから  
ちよろつの仇は畏れぬみいくさも  
多きとりこはもてあましつゝ

九連城占領の捷報を聞きて

小池 道子

いくさ人いかにこゝろを碎きけむ  
このかちどきをあくる時まで

九連城占領

阪 正 臣



城のみか師團のをさかいのちさへ

おちけるいくさ烈しかりけん

遠山英一

あたの城こよひとりての月を見て

よろこひ酒やくみかはしけん

皆人のまゆもひらけぬきつかひし

このたゝかひに敵をやふりて

岡田順達

大御旗ありなれこえてすゝみゆく

さきてにおつるわしの片はね

三橋中雄

こゝを瀬と仇の頼みしつゝらをり

折よくわれはしめ得つるかな

小川文治郎

ありなれの仇のかはねを橋として

やすくわたりぬやまと大丈夫

九連城の陥落をきこて

子爵 長岡護美

日の御旗今こそなひけあらわしの

巢をくふこまの峯のあなたに

深瀬真一

日のみはた風になひきぬ昨日まで

あたのこもりしどりてくゝに

光田文次郎



みいくさに攻めやふられて砲門を

すてゝにけつる敵のあはれさ

小川清風

國を思ふますらたけ雄の太刀風に

わたのゝ露はちりはてにけり

矢田部與市

かためたる九つらねもひどうちに

攻め落したるいくさをゝしも

木谷壽子

ありなれの川さへやすく渡りえて

ほまれをわけしすめら大丈夫

九連城の戦ひに近衛師團のいさをあ

りしときいて

外山且正

いさをしの高砂しまのおほかみも

よみしたまはむこの勝いくさ

戦捷を聞きて

佐々木松老

ひむかしの支那よりこまにおく露は

朝日をうけてやかて消ぬへし

深澤清作

きくたひにこゝろの駒も勇むなり

いくさのにはにかちどきの聲



●鳳凰城の占領

(黒木大將報告)

- 一、五月六日我騎兵斥候は鳳凰城東北に於て敵の騎兵を襲撃し死者三名傷者數名を生せしめたり
- 二、同日又我騎兵は二台子、三台子、四台子の敵を撃退し歩兵の一部隊を以て鳳凰城を占領せり報告に據れば遼陽街道沿道の家屋は多くは焼失せられたり
- 三、敵の退却途上に人馬逃走したる衛生材料遺棄し在りたるを以て之を當軍に收容し彼我傷者の治療に使用し又敵の衛生部員數名は其希望に依り之を敵傷者の救護に使用せり
- 四、敵は鳳凰城退却の際彈藥庫火藥庫を焼きたり七日に至



るも森林及び村落内等より出で來り我れに投降する敵の敗竄兵續々として絶えず又敵自ら埋葬したる墓地も少なからず土人の言に據れば去る二日擔架にて鳳凰城を通過せし敵の負傷者は約八百なりしと之に依りて見れば敵の損害は確に三千以上なりしならん

### ●遼東半島の占領

我一支隊は五月六日小數の敵を撃退して普蘭店を占領し鐵道電線を破壊して旅順との交通を切斷せり

### ●遼東掃海の續行軍艦宮古の沈没

第五戰隊及び第二水雷艇隊(第四十五號艇を缺く)は五月十

四日早朝大窰口沖に至り我艦隊掩護砲火の下に聯合掃海艇隊を放ちて掃海を續行す

敵は去る十二日ロビンソン角九〇〇呎の高地に在りたる監視哨を撤退したるものゝ如くなりしも大沽山北東六三〇呎山の北東側に新に假設砲臺を急造して野砲約六門を備へ又同山の東側に掩堡を設け歩兵約一中隊を配備する等應急防備に努めたるものゝ如く終日頑強なる抵抗を爲せり

此日掃海艇隊は終日敵の機械水雷敷設面内に在て敵の砲火を冒し能く其任務を遂行し水雷五個(内三個を撃沈し他の二個を爆沈す)を破壊し又我艦隊の砲火は陸上の敵に多少の損害を被らしめたり



然るに午後四時三十五分作業を中止し掃海艇を收容せんとするに當り敵の機械水雷不幸にも宮古の左舷艦尾に觸れ轟然爆發して艦體に大破を被らしめ死傷者二十四名(内戦死下士卒二)を出し艦體も亦二十三分時の後沈没するに至りたるは深く遺憾とするところなり

鳳凰城占領

藤崎 虎三

荒わしもつはさ收むるいとまなく

またもねくらを捨て、遁けむ

陸戦の勝利をきゝて

土田 道一

ありなれの川をわたりて日の本の

くかいくさ人かちしうれしさ

久木 田正秋

天皇のみいつにそひて日のもとの

ひかりいやます時は來にけり

川島 儀三郎



外國のひともとよみていはふなり

我ますらをのかしいくさを

目 壽 祐

皇軍の御稜威はいよく輝やきて

御代になひかぬ國やなからん

多 胡 喜 久 麿

御軍にあらそひかねてろしやひと

白はたあくるときやきぬらん

廣 瀬 令 行

神國のあまつ日つきのみいくさの

むかふかたには仇なかりけり

森 川 勝 美

すめ國のあまつ日かけのはた風に

あたのゝ鷺も落ちはてにけり

艦隊の陸軍掩護

千 葉 胤 明

陸いくさ思ふみなとに上げぬまは

なみの立居にこゝろ置くらむ

敵前上陸

大 口 鯛 二

敵は皆あとにひきけんみいくさの

うしほの如くよするみなとは

鐵道破壊

坂 正 臣



まかな路は絶たれ港はふたかれぬ

いつくへ敵はにけんとすらむ

普蘭店占領

遠山英一

程もなく敵はとりこと成りぬへし

のかれむ道をわれに絶たれて

加藤義清

船はくたけ道は絶たれぬあはれ仇

しら旗あくるはかなかるらむ

幡江晁

仇人のみなとにかよふよしそなき

めくるくるまの道をたゝれて

●第三次旅順口閉塞

(東郷聯合艦隊司令長官報告)

聯合艦隊は豫定の如く行動し五月三日午前三時四時の交を以て旅順口第三次の閉塞を決行せり閉塞船隊及之を掩誰せる赤城(艦長海軍中佐藤本秀四郎)鳥海(艦長代理海軍中佐岩村團次郎)第二驅逐隊(司令海軍中佐石田一郎)第三驅逐隊(司令海軍中佐土屋光金)第四驅逐隊(司令海軍中佐長井群吉)第五驅逐隊(司令海軍中佐眞野巖次郎)第九艇隊(司令海軍中佐矢島純吉)第十艇隊(司令海軍少佐大瀧道助)第十四艇隊(鵜真鶴)を缺き第六十七號艇第七十號艇を加ふ(司令海軍少佐櫻井吉丸)は二日夕刻艦隊と分れ豫定航路を旅順口に向ひ前進せしが不幸にして午後十一時頃より南東の強風俄



に起り波濤高く爲に閉塞船隊は離散し相失ふに至れり閉塞船隊總指揮官海軍中佐林三子雄は船隊の集合到底見込なきを認め閉塞事業中止の命を下せしも其信號到達せず午前二時頃迄通信に盡力せる間に船隊は相前後して既に旅順口沖に達せり然るに三河丸(指揮官海軍大尉匝瑳胤次)は港外を偵察せる第十四艇隊に對する敵の砲火を見て前續船既に港口に突進せるものと思考し直に港口に向て邁進し佐倉丸(指揮官白石葭江)と思はしきもの之に續く敵は港口附近に敷設せる視發水雷を發火し強力なる探照と猛烈なる砲火とを以て之を防禦せしも三河丸は港口防材の一部を破りて奥深く水道に闖入し中央の好位置に投錨爆沈し佐倉丸と思はしきもの港口尖岩の附近に投錨沈没す

之に次で遠江丸(指揮官海軍少佐本田親民)江戸丸(指揮官高柳直夫)小樽丸(指揮官野村勉)相模丸(指揮官湯淺竹次郎)愛國丸(指揮官海軍大尉大塚太郎)朝顔丸(指揮官向菊太郎)も相次て港口に向ひ猛進す此時敵の防禦砲火猛烈を極め其敷設水雷は前後左右に爆發し閉塞隊員の戦死負傷するもの最も多かりしが遠江丸は港口防材に衝突し船首を東にし殆んど港口の半部を閉塞して其位置に爆沈し江戸丸は港口に達し將に投錨せんとする際高柳指揮官は腹部を射られて戦死し指掃官附海軍中尉永田武次郎直に之に代はり投錨を命じ次で爆沈せり小樽丸相模丸と思はしきもの亦港口に入り沈没せるものゝ如く又愛國丸は港口より約五鏈の所に於て敷設水雷に罹り瞬時に沈没し指揮官附内田



弘、同機關長青木好次以下八名行衛不明となれり朝顔丸と思はしきものは舵機を損じたるもの、如く港口に達せずして終に黄金山下に爆沈せり右八艘の閉塞船の内五艘は港口に入りて爆沈せしを以て港口は少くとも巡洋艦以上の通航に對し充分閉塞せられたるものと認む  
 今次の閉塞事業は天候の異變と敵の防備増大したるに依り前二回のものに比し頗る慘烈を極め戦死負傷は甚だ多く特に小樽丸相模丸佐倉丸朝顔丸四隻の閉塞隊員は一も收容する能はず其最後の勇行さへ之を知るに由なかりしは遺憾至極なりと雖も其忠烈の事績は永く帝國の史乘に特記すべきものなりと信ず閉塞隊員の收容に従事したる各水雷艇隊及驅逐隊は翌朝まで風濤と戦ひ敵に抗して

能く其任務を盡し特に水雷艇隊は港口に接近して閉塞隊員の約半部を收容せり此難業中六十七號艇艇長海軍中尉松平眞雄は敵彈に汽管を破られ負傷卒三名を出し一時敵前に於て進退自由を失ひしが其僚艇第七十號艇長海軍大尉森本義寛は之を救助して曳行せり又蒼鷹司令兼艇長海軍中佐矢島純吉も敵彈に左舷機を傷けられ卒一名戦死し隼にては下士一名戦死せり其他驅逐艦水雷艇には一も損傷なし

第三戰隊司令官海軍少將出羽重遠は三日午前六時第一戰隊司令官海軍中將東郷平八郎、司令官海軍少將梨羽時起は午前九時旅順口港外に達して驅逐隊水雷艇隊掩護集團し午後四時まで各方面に分れて閉塞隊員の搜索收容に盡



力せしが終に得るところなかりし此日濛氣頗る深く爲めに敵状を見ること能はず夜に入り我艦隊は各其集合地點に引上げ四日朝より更に豫定の行動を續行せり

第三回旅順口閉塞の命をかゝふりて  
出て立つをり

海軍少佐 本 田 親 民

死といはす生ともいはす今さらに  
くのためにとたゝ思ふ身は

提灯行列

男 爵 高 崎 正 風

みいくさのかち路ねりゆく燈火に

かゝやくものは御稜威なり是

坂 正 臣

道もせにともし火捧けかちを祝ふ

人こゑたかし大御城のあたり



遠山英一

國民のあかきこゝろはつらなれる

このともし火にあらはれに梟

加藤義清

櫻田のうちとまはゆくともし火の

花をさかするかちいくさかな

子爵夫人 芝山松子

雲井までかけや見ゆらん國たみの

赤きこゝろのもゆるともし火

目田壽祐

かち軍いはふしるしの火かけにも

御代のひかりは照添ひて見ゆ

連夜祝捷の聲さかりなりけるに

小池道子

勝いくさことほく聲をまのあたり

たゝかふ人にきかせてしかな

皇軍連捷

権命婦 吉田愛

いくさ人戦かふことにいさましき

やまごころをあらはしに梟

千家尊弘

しへりあにはひほひこりし醜草も

かれしほむへき時は來にけり

竹崎嘉通



しへりあに羽たゝく驚も日の本の

神のいふきにきそひあへめや

大勝利を賀して日比谷の公園に萬歳

の聲きこえければ

兵動ほき子

久方のくもゐのにはにひゝくらし

日比谷にあくる萬代のこゑ

をりにふれたる

稻垣了齋

あめつちも動くはかりに聞ゆなり

うみの陸のかちどきのこゑ

雨森巖

のほる日の御旗の風になひさけり

しへりあの野にしける草木も

井村本太郎

空たかくのほる朝日のはたかせに

もろくも仇はにけうせにけり

龜山新一

日の旗のゆくへさへきる物もなし

もの音もなし西比利亞のはら

福田操三

敏鎌もてとくかり拂へしへりあの

われにあたなす露のしこくさ

安田權兵衛



みいくさのほつゝのたまに千萬の

わらふる鷺をうちやつくさん

齋藤千彌

すめらきの御稜威の風に國の名の

つゆとや消えんちよろつの仇

石原正誓

吹すさふわか神かせにふしはてゝ

見るかけもなし露のしのはら

清水到海

あたし野の露はもろくも消果てゝ

のほるあさ日に影もとゝめす

●初瀬、吉野の沈没

(東郷司令長官報告)

其一

本職は茲に三度不幸なる變災の報告を進達するを遺憾とす五月十五日午前五時千歳出羽司令官よりの無線電信報告によれば本日午前一時四十分頃第三戦隊は旅順口封鎖の任務より歸航中山東角の北方海面に於て濃霧に遭ひ春日は吉野の左舷艦尾に衝突し吉野は浸水甚しく終に沈没せり春日より出したる救助艇にて收容されたる者機關長以下約九十名なりと濃霧未だ霽れず痛心に堪へず

其二

本日は海軍に在て最大不幸の日にして茲に又最も不幸な



る報告を進達するの止むを得ざるに遭遇せり初瀬、敷嶋、八島、笠置、龍田は本日午前十一時旅順口沖にて敵を監視中初瀬は敵の水雷に罹り先づ舵機を破られ初瀬より曳船送れの電信に接したるを以て將に之を發送せんとするとき更に敷島より初瀬は第二の水雷に罹り終に沈没せりとの悲報來れり本職は之を報告するに臨み只だ遺憾至極と云ふの外なし善後の處置に就ては夫々出來得る丈けの手段を盡し災厄を増大せざるに努め居れり當地附近濃霧未だ霽れず

## 其 三

敷島は初瀬遭難狀況報告の爲め今當地に歸港しつゝあり驅逐隊全部及び二個水雷艇隊は敵の驅逐隊に當り且つ溺者救助の爲め午後一時三十分當地を發して旅順口方面に向へり霧未だ霽れず

## 其 四

初瀬が敵の水雷に罹りしは老鐵山の南東約十海里の所に於て當時同方面には霧なく又其附近に敵の驅逐艦もあらざりしと云ふ此事實より判斷する時は敵は其附近に機械水雷を沈置したるか或は又潜水艇を利用したるものならん初瀬は約三十分間を隔て二回の被害にて瞬時に沈没したるも敷島、八島、笠置、龍田等にて梨羽少將中尾大佐以下三百名を救助收容せり初瀬の沈没の頃敵の驅逐艦十六隻旅順口内より出で來り我を追尾せしが會々其地に來りし明石千代田、秋津洲、大島、赤城、宇治及高砂は前記諸艦と協力し



て之を撃退し初瀬生存者の收容を果すことを得たり以上の報告は混信の爲め文意不明瞭なるも無線電信は今朝遭難報告の爲め龍田の少尉並に八島艦載水雷艇指揮官の口頭報告等を綜合して製作したるものなり當地近傍霧未だ霽れず

其五

昨朝(十七日)濃霧霽れ各隊逐次入港す其報告により初瀬は全く敵の機械水雷に罹りしものなることを確かむるを得たり

初瀬吉野のしつみしをきいて

前田 漢子

名にたかき吉野はつせのさくら花

いかてもろくはちりはてに劍

をりにふれて

北里 闌

われになほ富士八島あり三笠あり

よし野初瀬はよししつむとも

布施 恒之

春の日のかすみの海にしつむとも

よしや吉野の名まてくつへき

露帝進發の風説を聞きて



萩原嚴雄

かしこくも君か門出のぬさしるに

さゝけまつらむ下瀬くすりを

從軍記者

大口綱二

勇ましきいくさの様を見するかな

うつす筆にも火はなちらして

外國從軍將校

江崎權一

とつ國の人のきもこそさむからめ

わかものゝふのいくさ振見て

●金州城陷落(奧大將報告)

金州附近の敵は時々緩慢なる射撃を行ひ我を誘致せんとするものゝ如し目撃する所に據れば金州南山には十五珊以上の榴弾砲四門、九乃至十五珊舊式加農十門、十二珊知速射砲二門あり尙ほ大なる野戦砲あるも備砲不明なり山上には少なくとも十個の砲臺或は堡壘あり其首線は北方及び東北方に向ひ鐵條網及び地雷も北麓及び東麓に在り前記砲の種類員數は敵の射撃に依り偵知せしものなり又弾片に依り判すれば十珊知五及八珊知五の舊式砲あり十珊知五の彈丸は八千五百メートルに達せり

其二



攻撃軍は本日(五月二十二日)豫定の運動に就く

其 三

攻撃軍の金州に向ふ前進は豫定の如く實施しつゝあり

其 四

攻撃軍は本日(二十三日)九里庄、陣家屯、塞子河の線の双方に  
集合し參謀將校をして敵の陣地の偵察を爲さしめ又本夜  
(二十三日)より明日に涉りては砲兵陣地及び其の進入路の  
偵察を爲さしむ

其 五

本日(廿三日)爲したる偵察の結果左の如し  
敵の右翼利尙島には約八門の重砲海に面しあり砲種不明  
其内若干門は東北馬家屯方向を射撃することを得

柳樹屯附近には大なる倉庫あり

南關嶺の東方高地線には短小なる敵の散兵壕の如きもの  
を見る

九里庄南方後營左營洋砲臺には探照燈ありて我陣地を照  
明す

今日迄敵の發射せし砲彈の破片に依れば廿珊知砲十五珊  
知砲短加農、十珊知半加農、八珊知六加農、七珊知六速射砲等  
なり又本日偵察將校に向ひ除家山砲臺に向ひ射撃せり砲  
彈は曲射砲にして其口經九珊知位なり

南山の東側閻家屯の附近より山の北麓を経て西北に曲り  
劉家店の東北約千メートル迄は一面に鐵條網あり之より  
左翼には防禦工事を見ず



金州には依然少許の歩砲兵あり

其六

艦隊よりの通報に據れば艦隊一部は明二十五日我軍の攻撃に連係して金州南方南山を攻撃すべしと

其七

攻撃軍は本日(二十五日)豫定の如く第一線を安王廟、三里庄、陣家庄、王家屯の線に進め午前五時半頃より同九時に涉り金州を攻撃し又南山の敵砲と交戦す金州附近の敵情に變りなく敵砲兵は盛に我隊を搜射し目下尙ほ時々我を砲撃中なるも我が損害大ならず軍は明朝金州南山の敵を攻撃せんとす

軍の攻撃に連係して金州附近を砲撃すべき艦隊の一部は本日來らず

其八

彼我の砲戦は二十六日早朝より約五時間に涉り其間我艦三艘も金州灣に至り我に協力し又敵砲艦一艘は大連灣に在りて我が左翼を砲撃す而して今や砲兵戦酣にして金州のみは午前五時二十分我が有に歸したり

其九

攻撃軍は二十六日激戦の後南山を占領し目下敵を追撃中

●金州南山の占領

軍は豫定の如く五月廿五日を以て攻撃準備を終り同廿五日夜半より運動を起し第四師團を右翼に第一師團を中央



に第三師團を左翼に併列し金州南山に向て前進せしむ此夜迅雷風雨咫尺を辨せず運動頗る困難なりき同時一部隊を以て金州城を攻畧せしむ二十六日午前四時三十分放火を開始すべき筈なりしも濃霧の爲め五時三十分全砲兵は内山少將の指揮を以て南山に向て砲撃を開始し同六時頃より我艦隊の四隻は金州灣より此砲撃を援助せり敵は全備砲を以て之に應戦し茲に激烈砲戦を交へ約三時間の後南山の敵火大に減衰せり此に於て各師團の歩兵は前進を起し一進一止し敵の砲火を犯し敵の第一線を距る約三百乃至五百五十米突の地に達せり

午前十一時敵の露天砲は我猛烈なる砲火に依り悉く沈黙せしも速射野砲約二中隊は疾く退却して南關嶺の高地に

據り終極に至る迄時々我を射撃せり午前十時頃敵の砲艦一艘和尚島砲臺東方に來り午後二時頃迄我第三師團の左側背を砲撃し且つ小蒸汽艇五艘に搭載せる陸戦隊を紅土涯附近に上陸せしめんとせしも我一部之に向ひしを以て遂に歸還せり又南山南方大房身に在る敵の九珊米砲四門は午前七時頃迄我第三師團に向つて砲撃を繼續せり我左翼に在る砲兵之れと應戦せしも距離遠くして充分の効力を顯はす能はず敵の占領せる南山の陣地は峻峻なる高地線に半永久築城を施し大小砲約七十門機關砲八門を備へ連續圍繞せる數層の堡壘線には銃眼を穿ちたる援蔽部を作り其前方には數多の地雷及び鐵條網を設け且つ此間隔を補ふに多數の機關砲を以てせり之に對する我砲兵は全



力を舉げて之が破壊に努力し又屢々陣地を交換して敵に接近し以て歩兵の前進に勢力を與へたりしも敵歩兵の抵抗は頗る頑強なりしを以て午後五時に至る此時我歩兵の爲め未だ突撃の進路を開くに至らず又我左翼に在る第三師團は敵の包圍を受くるのみならず敵は漸次其歩兵を左側前に増加し且つ南關嶺に在る敵砲二中隊は此攻撃を援助し益々師團の左側に迫らんとす而して我携行砲兵彈藥は將に盡きんとし戰鬪を永く繼續すること能はざるに至れり依りて止むを得ず歩兵をして損害を顧みず強襲を行はしめ砲兵は補充し得る彈藥を盡して敵を猛射せしめたり我第一師團の歩兵は意氣衝天の勇を鼓して敵陣に向ひ突撃せしも敵の猛烈なる瞰射と側射に依り多數の死傷者を

を生じて前進を繼續することを得ず頗る苦戰に陥りしが恰も良し此時金州灣に在る我艦隊は敵線の左翼に向つて更に猛火を開き砲兵第四聯隊に協力し敵火の撲滅を努め第四師團は此機に乗じ全力を舉げて敵の左翼に迫り先づ高地線に進む

此に於て第一及び第三師團は之に協力し全線を舉げて勇奮突入し累累たる死屍を超えて敵壘に肉薄し劍尖相接するに至る迄激戰して遂に南山を攻畧し各堡壘上に國旗を翻せり時に午後七時過ぎなり敵は潰亂して旅順方向に退却せり此退却に當り敵は大房身の火藥庫を爆發したり軍の一部を以て敵を追撃したる後全隊戰場に露營す此時士氣大に振ひ萬歳の歡呼諸方面に起り砲兵は全力を竭して



敵を追撃す我に對せし敵の兵力は野戰軍約一師團野戰砲  
二中隊要塞砲兵海軍兵若干なり察するに敵は旅順及び大  
連灣を掩護する爲め爲し得る限り南山の陣地に據り我前  
進を防止せんことを努めたるものにして尙ほ其防禦工事  
を増加するの計畫ありしが如し敵の死傷は不明なるも戰  
場に遺棄せし死體のみにても五百名に下らず捕虜は將校  
以下若干名又戰利品は砲約六十八門機關砲十門發電用蒸  
汽機關一個電氣燈三個ダイナモ一一個地雷鐵罐約五十個  
其他小銃及び彈藥諸材料等なり其詳細は目下取調中我軍  
死傷將校以下約三千五百名終に臨んで海軍の有力なる援  
助に對しては深く其好意を謝す

十六時間の激戦

男爵 千家尊福

久しきにたへ難き世のならばしも

此御いくさをうちやふりける

坂正臣

はけしくもたゝかひしかなわか軍

十まり六ときいきもやすめす

大口鯛二

ひさしきに堪へしを見ても皇軍の

すくれてつよき程をしらるゝ

千葉胤明

うつたまも力もつきすわたみかた



守りもまもりせめも攻めたり

遠山英一

ぬはたまの夜を日につきて戦ひし

わかいくさ人おもひこそやれ

加藤義清

かはかりの時をさへへて射向ひし

仇のつよさをおもひやらるゝ

迅雷風雨中の進撃

坂正臣

かみはなり雨はふきなす真夜中も

あたうついくさつらも亂れす

大口鯛二

みいくさの進み行手はさまたけす

ときいかつちも雨もあらしも

千葉胤明

進みうつほつゝの火花いかつちと

雨夜のそらをてりかはしつゝ

遠山英一

鳴神のおとにまきれていくさひと

仇のとりてにすゝみよりけん

我兵沈勇

坂正臣

とふ弾の雨よりしけきなかにして

みなともふたき橋もかけゝり



加藤義清

のる船のしつむいまはに浪のこと

立ちさわかぬや大和たましひ

追撃

男爵 千家尊福

おひしきてうつや火筒の玉あられ

まろひくたけぬ仇はあらしな

突撃

男爵 千葉胤明

いくたひか味方のかはねふみ越て

つきくつしけん城もとりても

南山激戦

男爵 千家尊福

しかはねを越てはまたも倒れての

後にやまむといさみたちけん

玉しきて終にむかへんみいくさと

しらてや仇の火つゝうつらん

金州灣陸軍徒渉

坂正臣

みいくさはみなきる潮に飛入りて

わたらうちうみの江を渡りつゝ

大口鯛二

こゝを瀬とふせくあたをも退けて

海おしわたるますらをのとも



加藤義清

仇波のたちさわくをもかへりみす

かちわたりせし益良雄あはれ

南山占領

男爵 千家尊福

日の御旗みなみの山にかゝやけり

北のくにひとふしあふくとも

遠山英一

われさきに仇はにけゝん斃れたる

友のかはねもかへりみすして

光田文次郎

鐵よりもかたきこゝろの見ゆる哉

はりかね破るますらたけをは

南山の激戦に我軍の戦死者を悼みて

鹽原熊次郎

夏くさのつゆと消えにし益良雄の

しらせにぬらす袖たもとかな

砲臺

護得久朝常

大砲をすゑしうてなも守るひとの

こゝろ弱くはかひなからまし

地雷火

護得久朝置

かねてより雷ふせてまつなれば



捕虜

よせくる敵をみなころしせん

坂正臣

たゝかひにつよきのみかは情まで

ふかき御國とおもひ知るらん

加藤義清

年へてもゆめ忘るなよおほきみの

めくみのつゆに霑ほひし身を

松澤正澄

ひとたひはあたとなるとも真心に

くたらはなとか恵まざるへき

捕獲馬

加藤義清

小夜ふけて嘶く見れはみうまやに

いくさの庭のゆめや見るらん

大口鯛二

御軍にたてまつらむとよきうまを

かねてもあたの飼や置きけむ

千葉胤明

皇軍のえものとなりてしへりあの

野末のこまも世にしられつゝ

戦勝ちて近衛公を思ふ

千葉胤明

いさましきみいくさ人の勝ときを



苔のしたにやきみはきくらむ  
連戦連捷

鶴岡定之

海山もどよむはかりにひくくなり

みいくさひとの勝どきのこゑ

宇井可道

日の旗のみいつの風にしをるらむ

世にほこりにし鷺のつはさも

陸軍の捷報をきゝて

山田文平

さし昇る朝日のひかりかゝやきて

もろくもきゆる草の葉のつゆ

あさつゆは我日の本の御ひかりに  
佐藤直彦

うちてらされて消え果てに息

泉而足

天津日のひかりをうけてしへりあの

つゆどきえゆくしこのたみ草

沼倉さと子

やかて見よ我か日の本の山さくら

うらるの峰に咲きはふらん

矢島順平

たゝかへはかならす勝て日の御旗

かゝやく國のほまれたかしも



吉田忠恕

日の御旗うらるの峰におしたてゝ

みちなき國にみちををしへん

折にふれたる

中邨秋香

かちてすら人は數多もうせにけり

うたてきものはいくさなり梟

吾子やいかに吾せやいかに勝ち軍

勝ちぬときくは嬉しけれとも

守本朴鳳

いままでの罪をはわひよろしや國

人のふむへきみちをたどりて

松澤正澄

天か下にとゝろきにけりしき島の

やまどみくにの筒のひゝきは

大橋榮

鈴の音におとろきたちて買ふ文は

またも御國のかちいくさかな

渡邊敏謙

かみどこそいふへかりけれ戦へは

かならす勝をつくるみいくさ

西澤善兵衛

大君にさゝけまつりし身なりとて

のこる妻子のいさむこゝろは



鏑木忠兵衛

うみに陸に仇なかりけり日本の

ますら健雄のむかふかたには

鏑木まつ子

しき島のやまと島根のつはものは

おそろしやとも思はさりけり

植松延恭

日の本のひかりかゝやく夏の日に

かれやはつらむろしやの露草

遼東南部港灣封鎖

大口鯛二

みなと口うらもおもても鎖されぬ

小舟のかよふすきまなきまで

千葉胤明

いろくつのかよはん隙もなかる覽

みいくさ船のとさすみなどは

掃海

植松有經

すめらきの御國のものとなして是

わたの底まではらひきよめて

大口鯛二

わたつみの底に潜めるいかつちを

はらひつくさん神かせもかな

遠山英一



いかつちにかゝるを見ればふな軍

たゝかふよりは危ふかりけり

加藤義清

たはやすく船はかよへり和田つみの

そこのたまもを拂ひつくして

青泥窪上陸

大口鯛二

ひとさゝへさゝふる仇もなかり梟

みなどのとりて我にまかせて

橋を毀ちみなとを捨てゝ遁つらん

我御いくさのせめよせぬまに

時事雑詠

矢島義道

くれなるの血汐なかるゝ川瀬をも

いさみ渡れりますらをのとも

いくさ人身はしへりあに曝すとも

君かみいつをわするなよゆめ

柳澤文真

千代ふともたてし功はくちせめや

いのちはくさの露とけぬとも

井村米太郎

そらたかくのほる朝日の旗かせに

もろくも仇はつゆとちりつゝ

動員令を待ちわひて



陸軍少將

小 泉 正 保

今夕なほそら頼みとは知らねども

おほつかなくもまつ外そなき

某師團は最後にあらざれば動員令下

らずと聞きて

きもを嘗め薪にいねしかひもなく

またみいくさをよそに見る哉

遠からず動員令下ると洩れ聞きて

あつさゆみはるには暫し後れても

花のかすには洩れしこそ思ふ

いよく動員令に接して

山さくら春にはよしやおくるとも

あさ日に匂ふいろはかはらし

出発のとき

かねてよりかくとは思ひ定めしも

母にわかれの惜しまるゝかな

子に示す

親につかへ學ひに勵みひたすらに

おのれゝか身をはみかけよ

斥候行

陸軍歩兵伍長

瀧 口 述

里やいつこ敵やひそまん霧こむる

山のふもとにいぬのこゑする

それとなくいこふ木かけに敵人か



つなきしこまの足趾のこれり

月冴る野邊に立ちたるうつろ木を

しはしは敵の伏すかたとそ見し

露ふかき草のふすまに太刀まくら

こよひもきぬ山ほとゝきす

從軍雜詠の中に

松田甲

はるくくと糧おくり行く牛くるま

起せるちりのはてもなきかな

五月二十日七盤嶺にて敵を討ち退け

し後しはし木蔭にやすらひけるに姫

百合の花の咲けるを見つければ折

り取りて故郷なる師の許に贈るとて

多田春樹

外國の野なからゆかしこまつなく

老木かもとのひめ百合のはな

かへし

富田行正

もろこしの荒野のはてに言の葉の

花さくへくとおもひかけきや

出征中なる兄柳萬に菊の畫をおくる

とて

井上三男

もろこしの荒野は花もさかさらん



これみてしのへふるさとの庭

返し

在戦地

井上柳萬

諸越の野にしてみんどおもひきや

わか日の本のしらくのはな

出征中の義弟歩兵軍曹栗川久幸のも

とより端書をはしめて得たるとき報

國唯一心至極壯健に遼東の野に起臥

すどありしをみて

島津久實

一言は千々のふみにもまさりけり

とる手おそしと見つる端書の

月のよきよ父母の上を思ひ出て、

海軍中軍醫

石川宏平

戈とりて波よりなみのかちまくら

月かけこひしふるさとのそら

鈴木梅次氏臨終の際實兄不羈次氏と

はからす再會し我血にそみし小石を

とりて親の許におくりしとききて

山東たい子

ゆくりなくめぐりあひしも同胞の

つきぬえにしのおれはなる覽



●常陸、佐渡兩船遭難

(六月十六日大本營着電)

其 中 一

佐渡丸は十五日午前十時玄海沖にて敵艦三隻の砲撃を受け其結果戦闘員は敵艦に來れ非戦闘員は本船を去れとの申込を受け遭難者約七十名此地に漂着せり糧食なし

其 二

土佐丸は六連島にて常陸丸の生存者三十七名を救助して入港す  
軍曹田所龜松二等卒藤崎虎一及び火夫山瀬辰二郎の報告に據れば常陸丸は十五日午前十時半頃敵艦三隻に追はれ



全速力にて前進す敵は初め空砲を放ち引續き實弾にて連續急射撃し死傷するもの多し此際彈藥庫を開く間もなかりしが敵艦は更に接近し側面より急射撃を爲し汽罐破裂乗組者死するもの多し又第三艙より失火す藤崎二等卒は分隊長沼里伍長の命に依り聯隊旗を保護せんとせしに聯隊長須知中佐は既に軍旗を焼き旗竿を碎き居られ汝等は海上に泳ぎ歸りて此旨を報告せよと命ぜられたるが間もなく砲彈肩に中りて戦死せり將校の大部は割腹又はピストルにて自殺某中隊長は海に投ず此間ボートを卸す間もなく船長事務長海に投ず監督將校戦死せり二等運轉士自殺敵は更に第三回の急射撃を爲し常陸丸は全く沈没す浪高く敵艦の行動不明なれども前方に有りし佐渡丸は西北

に向て進行せり其後一隻の漁船にて三十七名救助せられ六連島に着き土佐丸に救はる

沈没の際尙ほ一隻の端艇あり三十名許り乗りたる様なれども行先知れず

救助せられたるは田所軍曹外兵卒三十四名火夫一名船内人夫一名なり内輕傷十二名稍や重傷一名あり土佐丸にて本日宇品に送る



須知中佐

近藤久敬

御軍のしるしのはたはやきすてつ

船もいのちもあたのまにく

大口鯛二

やきすてゝあたにわたさぬ旗竿の

なかくつたへんたけき其名は

千葉胤明

たへさる人こそなけれ仇浪に

みはたぬらさぬ君かいさをは

坂正臣

清き火に御旗をやきて君か代を



いはひなからやめをふたき劍

常陸丸船長ゼー、キヤムベル氏

山東たい子

世に高しつとめ果していさきよく

ふねと沈みしきみかその名は

太田常陸丸事務長

船長はこどくにひとそわれひとり

重荷おはむといひしきみかな

沖島遭難者生還

北里 関

沖の島海士かすくひしなきからの

なかにいくたりよみ返りけん

遠山英一

和田の原沖のこしまをめあてにて

汐のからくもおよきつきけん

聯隊旗手大久保少尉の遺髪を見て

山東たい子

玉くしけ箱にひめたるくろかみの

なかきかたみとなりし君かな

常陸丸殉難將校の葬儀に列なりて

船 曳 衛

海行かはみつくかはねの言の葉を

まことにしたるますらをの友

脇光三君の忠死を悼みて



下田歌子

國の爲おもひたえてもたらちねの

みおやのもりの歎きをそ思ふ

阪正臣

筆なけて御國のためといのち毛の

たゆるまてにと書きつくし劍

脇氏の最後のさまをよみ侍りて

鈴木小舟

ちりきはに君か洩らし、笑ひこそ

やまどの花のにはひなりけれ

志士脇氏の履歴を讀みて

安倍井磐根

すくく〜と千里かけりし益良夫の

こゝろの駒のいさましきかな

事し有は火をも踏まんと思ひてし

こゝろのあとも見ゆる道かな

天か下たれかあふかぬくにのため

われとくたけし玉のひかりを



## ●旅順大海戦

(八月十二日東郷聯合艦隊司令長官報告)

聯合艦隊は一昨日敵艦隊の旅順口を脱出して南下せんとするを遇岩附近に邀撃し次で之を東方に追撃し午後一時より日没過ぎまで激戦し敵に多大の損害を與へたり此戦闘の後期に於て敵の砲火は大に衰へ陣形は全く潰亂して各艦個々に分裂しアスコリツド、ノーウ井ツク驅逐艦數隻は南方に遁航し其他の諸艦は各旅順口に向ひ我驅逐隊水雷艇隊に追尾襲撃せられて更に少なからざる損害を受けたるものゝ如くツエサレウ井ツチは其救命浮標及び屬具等の戦場に浮流せるに徴すれば或は轟沈されたるならん驅逐隊水雷艇隊襲撃の結果に就ては未だ詳細の報告に



接せず右アスコリツド、ノロウ井ツク、ツエサレウ井ツチ、バ  
ルラダの外は昨朝旅順口に遁入したるが如し我艦隊の諸  
艦には大なる損害なく今後の戦闘に支障なし死傷は全隊  
を通じて將校以下約百七十なり

哨艦

近藤 久 敬

仇浪のしほの八百路にせきすゑて

あさゆふ去らす守るふねかな

大 口 鯛 二

わたなみのたちるを守るいくさ船

汐のよるひるいとふまやなき

旅順の敵艦

井 村 米 太 郎

網の目をのかれぬ魚の藻かくれに

何をいのちと身をひそむらん

逸出を企てし旅順敵艦の敗北せしを



三笠山おろすあらしにくたかれて

散りし木の葉の波にたよふ

海戦の捷報を聞きし時

深瀬真一

海のいくさ勝ちぬと聞て先ぞ思ふ

我子の乗りしふねはいかにと

制海權

松原美成

仇艦のゆきゝのみちもたえはてゝ

御稜威あふるゝ海のうへかな

●日本海の大戦

(八月十五日上村第二艦隊司令長官報告)

十四日天明出雲艦長海軍大佐伊地知季珍(吾妻艦長海軍大佐藤井數一)常磐艦長海軍大佐吉松茂太郎(磐手艦長海軍大佐武富邦鼎)は韓國蔚山沖に於て索敵行動中浦鹽艦隊三隻の南航するを發見せり敵は我隊を見るや北に向ひ遁走せんとするを以て直に其前途を扼し午前五時二十三分に至り戦鬪を開始せり  
敵の殿艦リユールリツクは常に後れ勝にて斷えず激烈なる砲火を被れり前續二艦は屢々勇敢に之を掩護し遠ざかれば轉回して之に近づき近ければ又前進せり依て我艦隊は屢々丁字形を畫きて敵に集彈するの利を得たり其結果敵艦



をして何れも數次大火災を起し多大の損害を負はしめたり

特にリユールリックの如きは遂に進退の自由を失ひ砲力も全滅に近づき時々緩慢なる發射を爲すのみにして其艦尾は著しく沈み且つ少しく左舷に傾斜するを見たりしが敵は遂に之を捨て、遁走せり恰も好し第四戰隊戰場に近づき浪速艦長海軍大佐和田賢助高千穂艦長海軍大佐毛利一兵衛のリユールリック攻撃に進むを見たるを以て本隊はロジャグロモボイを追撃せり此間激戰約五時間に及び敵の二艦は全速力を以て逃走す

午前十時十九分我戰隊は右舷に回頭しリユールリック搜索の爲めに南航せるにリユールリックは遂に沈没せるの報に

接せるを以て直に全隊の集合を命じ其沈没位置に至り浮泳する人員六百名を救助し得たり

我艦隊は多少の損害を受けたるも何れも重大ならず士氣極めて旺盛なり

今回の戰鬪に於て重大ならざる損害を以て多少の効果を收め得たるは偏に大元帥陛下の御稜威に因るものにして一同感激に堪へざる所なり

「備考」司令長官海軍中將上村彦之亟は出雲に司令官海軍少將三須宗太郎は磐手に座乗せり

又第四戰隊司令官は海軍中將瓜生外吉なり



敵艦リユトリックの撃沈

北里 関

沖の島はれわたりにけり身に負ひし

人のうらみもくにのうらみも

浦汐艦隊の敗北を聞きて

千葉 胤 明

國民のうらみもこもるおほつゝに

うち沈めけんあたのおほふね

上村艦隊將士の家族を思ひやりて

萬歳と呼ひつゝくらしおやも子も

手の舞ひ足のふむをわすれて

上村司令長官



加藤義清

對馬瀉なみちさやかにくもきりの

はれてうれしき月や見るらん

戰地視察滿州丸

北里 闌

事ならはのり入れて見む捕獲たる

あたのふねにて仇のみなどに

大山總司令官の出發を送りて

坪井 晋

十年へしうらみの露をうちはらふ

君かかどての今日をうれしき

西比利亞の原のしこ草なきはらふ

きみかほまれを今よりそ待つ

弟の召集に應じて出立つ時

高木民之助

いさや行け行けや弟ちどせにも

猶あひかたきこのみいくさそ

殊更なるつとめおほせつけられけれ

はいと嬉しく譽あることに覺えて春

日を立ち出て、任に赴かむとする時

よめる

海軍少佐 高崎元彦

この事のしとけん迄はたふれしと

おもふはかりのこゝろなり梟



我子元彦戦死の報を聞きて

男爵 高崎正風

大君のみをしへくさをしをりにて

さきたちし子を何かなげかん

兄君(高崎少佐)戦死を聞きて

芝山松子

わき出つる涙とよめんよしそなき

國のみためとくちにこそいへ

田中竹子

心にはあきらめなからいくそたひ

かへらぬことを繰り返すらん

高崎海軍少佐の戦死を聞て

高倉壽子

國の爲めつくさんときとすてし身の

名はよろつよに輝やきぬへし

柳原愛子

なきかすに入ると聞こそ悲しけれ

もとより捨しいのちなれとも

千種任子

君の爲みくにのためになふれたる

其の名は朽ちし千代の末まで

小倉文子

たくひなき功をたてしらなみの

返らすなりし君をしそおふも



園 祥 子

君か身は仇の城の上になふれども

たまはいくさの勝まもるらん

姉 小路 良子

みいくさのかちときまたて國の爲

くたけし君か身こそをしけれ

下 田 歌子

ものゝふの鏡となりてくたけたる

なみまの月のかけのさやけさ

● 遼陽占領

(九月一日滿州軍  
總司令部電報)

敵は我猛烈果敢なる攻撃に堪へず一日早朝以來遼陽方向に退却し左翼軍の一部及び中央軍は猛烈に之を追撃中敵は太子河右岸に撤退せんとして遼陽附近に大なる混亂を起しつゝあり我戦利十珊知半加農は遼陽停車場附近を盛に砲撃しつゝあり

右翼軍は一日午前十一時黒英臺の敵を攻撃中左翼軍の首力は二日早朝より更に敵を太子河に壓擠せんとす

二十九日以來我軍の損害未詳なるも多分一萬内外ならん

其二

九月三日より四日に亘る夜間及四日朝に於ける戦闘にて



遼陽は全く我有に歸せり  
太子河右岸の情況は其後未だ精確の報に接せず  
我軍の死傷は多大なる可きも未だ詳報に接せず目下取調  
中

補助輸卒隊

千 葉 胤 明

たゝかひの功におとるいさをかは

くるまをひくもかてを運ふも

捕 虜

植 田 建 教

なつかしき汝か故郷もわするらん

いたりつくせる國のなさけに

敗 兵

川 上 佳 長

いかつちのひゝくかごとき大砲に

にけゆくあたの見る影もなし



軍馬

大鹽學道

地はやけ風は死にたるなつの日

いくさのかてをはこふ馬かな

軍旗

一條悦子

日の本の御旗のかせにあめかした

なひかぬ國もなきよなりけり

鐵條網破壊

大野泉

黒金のあみもさなからさゝかにの

蜘蛛のふるまひかき拂ひけむ

敵前架橋

角田ともゑ

ありなれの川のうしほと寄來なる

あたなみくたき橋はかけゝん

雨中進軍

竹田隆學

鳴神もしのつくあめもかへりみす

すゝむいくさの勇ましきかな

田中昌

まのあたり仇を迎へてもものゝふは

しのつく雨をおかしてそゆく

露將の戰報に曰く日本の追撃狂暴を



極むと

塚越芳

鬼神のあらひ出てしとおそれけん

おほみいくさの強さ知らすも

提灯行列

古田保文

かちどきをあけてねりゆく燈火は

國のひかりの花にそありける

祝捷旗行列

鈴木八束

おしなへてたつるあさ日の旗風に

あたのとりてはつゆも残らし

戦捷祝賀

武田直樹

天地もゆるくはかりにきこゆなり

みいくさ人のかちとさのこゑ

湯河原に療養中なる負傷將士を慰問

して

侯爵 鍋島直大

薬湯のしるしも見えてたのもしき

みいくさ人のきすのいえたる

豫備病院にありて

市原隆作

今日もまた軍かたりを聞きにけり



今日もあはしま近きあをさりのかけ

長岡騎兵少尉の戦死を悼みて

池邊義象

きみかこま莫斯科河にみつかはむ

音つれをのみわれは待ちしを

日のみはたかやく功脊におひて

かへらん君をわれはまちしを

坪内銳雄君の戦死を悼みて

在戦地 瀧口述

みいくさに君もゐますと知りし時

きみは早世に在まさりけり

我縁邊の甥にあたれる平岡八郎か戦

死を聞いて

子爵 黒田清綱

萬代にほまれそのこるくにのため

よくこそ身をは盡したりけれ

北田中尉の戦死を

櫻井喜一郎

赤駒にしつくらおきて北のくにの

あらわし射むと出てし君はも

をりにふれて

大野種平

やきかまの利鎌を持って西比利亞の

しこくさはらふ時は來にけり



山本壽助

みいくさの筒の火花のはけしさに

ちりてみたれぬ仇なかりけり

南耕倍

かちときの聲と共にあかりけり

わか日の本のくにのほまれは

外山且正

菖蒲太刀はきて遊へるめくし子の

けなけなるにも君ししぬはゆ

深瀬真一

かちいくさ嬉しけれとも友ひとり

またうちしにどきくそ悲しき

渡部甚吉

讀賣のすゝのおとにもおもふかな

我みいくさのたよりいかにと

櫻井喜一郎

たふれふすとも屍をふみふみて

進むますらをあはれ雄々しも

玉井吉太郎

みいくさの向ふところは仇もなし

朝日かやく西比利亚のはら

磯貝三右衛門

萬代にためしもきかぬみいくさそ

なに惜むへきかきりある身を



廣瀬正種

勇ましきやまとたけをの太刀風に

なひきふすらん西比利亞の原

川口鐘子

ますらをの恨みやいかに玉くしけ

ふたゝひふめるもろこしか原

山田さと子

神代よりきたえあけたる太刀風に

なひかぬ國はあらしこそ思ふ

藤野鉦齋

笑ひつゝ船にのほりしきみか身を

泣てをしまぬひとやなからん

志省三

軍はてゝ火筒のけふりきえゆきし

みそらにのこるゆみはりの月

井原豊作

乗るこまのひつめにかけて遼東の

城の上に旗をきみたつらんか

待旅順口陷落

伯爵 壬生基修

みいくさの旗手の風につゆとのみ

あなたの亂れん目こそまたるれ

男爵 渡邊清

命ともわたのたのめるみなとをは



攻め落すへきときちかつきぬ

男爵 小畑美稻

海に陸に守れるあたをやふりなは

御稜威はいよゝ四方に振はん

男爵 藤枝雅之

あらわしのこゝと占めたる唐土の

みなとのいはほつひに崩れん

主殿助 中川忠純

黄金てふ山の上たかく日のみはた

なひかん日のみ待ち渡るかな

鎌田正夫

かねのあみ幾重はるとも深きほり

いくへほるとも今におとさん

滋野井實麗

こゝをせとふせきたゝかふ仇人の

みなどのおちん時ちかつきぬ

中澤重業

ますらをか身をも沈めて鎖しつる

みなども今か御手に入るらん

尾崎実夫

仇こもるみなととりうへき時つ風

侍ちこそ渡れ今日か明日かと

長利清平

頼みにし仇のとりての落ちん日を



待ちこそわたれ朝なゆふなに

冲禎介君を悼む (本會兼題抄)

伯 爵 東 久 世 通 禧

日の本のますらたけをのあらみ魂

天かけりてもわたをうたなん

侯 爵 鍋 島 直 大

こゝろさし貫ぬかぬまに仇の手に

身をはたしつるこゝろ悲しも

鍋 島 榮 子

いかはかり悔しかりけん仇の手に

かゝる恨みをきみははらさて

男 爵 渡 邊 清

いつはりはやまと心のまことそと

たふれし君のいさきよきかな

子 爵 竹 屋 光 昭

潔きよき名のみ残して西比利亞の

つゆと消えにし君をしそ思ふ

子 爵 水 野 忠 敬

からくにゝとほくふみ入りて仇浪に

碎かれしこそくやしかりけれ

文學博士 木 村 正 辭

いさましやすてし命は日のもとの

國のみためそきみかみためそ

阪 正 臣



ものゝふにあらぬ身にして武夫に

勝るいさをゝたてんとやせし

丸山正彦

國の爲あたのをつゝにうたれけむ

恨みはらさてやまんものかは

宮地巖夫

身をすてゝ國の爲にと西比利亞の

奥までふかくおもひ入りけむ

中邨秋香

世に残る香こそ高けれあたしのゝ

草の葉かくれちりしそのはな

陸軍歩兵少佐 平井直

よしや身に苔はむすともこの君の

赤きこゝろは世々にくちせし

井上頼圀

國の爲こゝろつくしのおきのふね

思はぬかたにはてにけるかな

大道寺繁禎

北支那の草葉のつゆときえしかと

きえぬその名は世に薫りけり

島津久實

からころもつゝみかねけん國の爲

もゆるか如きやまどこゝろは

鍋島禎子



仇し野の露とその身は消えぬれど

いさをそ残るよろつよまてに

鍋島茂子

あな悔しおもひもとけす敵の手に

露と消えにしきみか身のうへ

鍋島信子

仇の手に君ははかなくたふれても

大和こゝろはあらはれにけり

大口鯛二

人知れすこゝろつくしの沖のいし

くたけてそ世に顯はれにける

千葉胤明

西比利亞の野末の露のおきふしに

くたさしこゝろ思ひこそやれ

黒川眞道

いのちはも仇の火筒に消えぬれど

きえぬいさをは世にひゝき梟

山英一

わたつみのふかき心はありなから

泡ときえにしこそそくやしき

加藤義清

仇をこそおどろかしけれ今さらに

いふへきことのならしと答へて

雨森巖



君か名は世々に残らんあつさゆみ

はるひんの野の露と消えても

井原豊作

わたつみの深き重荷を負ひなから

なとくたけ、む沖のまたまは

山川佐代子

とこしへに世に社薫れ西比利亞の

芝生かくれにさきしそのはな

片山今子

仇浪にくたけなからもおきの名の

動かさりけんこゝろを、しき

村井兼子

一筋にくにをおもひてあたしの、

露とはあられ消えにけるかな

宮崎奈美子

外國のつゆと消えにしこのきみの

いさをはたかく世に残るらん

江崎権一

哈爾賓の雪にそゝきしきみか血は

わかくにたみのいのち也けり

大矢忠衡

西比利亞の荒野の風に散らさらは

大和こゝろの實もむすはんを

稻垣重一



哈爾賓の土となりてもものゝふの

猛きその名は世にきこえけり

富澤政恕

仇草のつゆときえてもまこゝろの

ひかりを國にのこしけるかな

綿引謙

日の本にやかてにははん花をしも

はかなくちらす春の夜あらし

平井文太郎

かくはしき名のみ残して哈爾賓の

雪とはかなくきえしきみかな

坂倉仁五郎

眞心をあつさのゆみにはるひんの

露とちりにしますらをあはれ

和合庄吉

國の爲あたのかなちをたゝんとて

齊々哈爾近く入りしきみかな

山口道賀

一人にてちよろつの仇とゝめなん

君まかねちをたちなましかは

廣瀬正種

大國のみねに消えにしものゝふの

みたまは守れ西比利亞のはら

土田道一



喇嘛僧のころもに身を包みても

やまとこゝろはあらはれに是

大國のふはり前まじりのノミ  
大國のふはり前まじりのノミ  
一人コトよまふての舟もノミ  
一人コトよまふての舟もノミ  
國のふはり前まじりのノミ  
國のふはり前まじりのノミ  
真心のふはり前まじりのノミ  
真心のふはり前まじりのノミ

出征の途中にて

陸軍少將

中

村

覺

鄙都、いづくのはても。もろ人の、集ひ集ひて。  
とりぐに、厚く犒らひ。くさぐさの、はなむけしつゝ。  
こなたには、御旗打ふり。かなたには、諸手さしあげ。  
ものゝふの、門出いはひて。萬代を、よびたゝへたる。  
その聲は、げに勇ましく。天地に響き渡りて。  
きこえけるかな。

反歌

かちどきの聲もかくやと思ふまで

よろつよゝはふ國たみのこゑ

詠露兵長歌一首



懸田訓平

外國の露西亞のこきしは。      たけ高く、強しといひて。  
 さかしらに、ほこらひ居れと。      大方は、書もよみ得す。  
 大方は、文字もかき得す。      君思ふ、道をも知らに。  
 國思ふ、心も知らに。      命のみ、惜みてあれは。  
 火筒うつ、業もつたなし。      太刀かきの、業もつたなし。  
 かかれこそ、海の軍も。      しかれこそ、陸の軍も。  
 御軍に、手向ひかねて。      ちりくに、逃れゆくらめ。  
 露西亞のこきしら。

征露軍歌

陸軍少將

福島安正

世界に名高き日本國      旭に輝く日の御旗

皇統連綿大君の      臣子は今や五千萬  
 仁義を以て建てし國      忠勇勝りし國民の  
 之れに反する敵國の      其有様は皆知らん  
 うそ偽りを常として      他國の領地を掠取り  
 咎なき家を焼き拂ひ      罪なき人を擊殺し  
 逃る婦女子を辱しめ      乳に泣く小兒を刺殺し  
 兇惡暴戾神人の      共に赦さぬスラヴ人  
 國は廣きも荒野原      人は多きも烏合勢  
 一億有餘の人口も      六十有餘の異人種ぞ  
 直隸平野の戦ひに      進み兼たる卑怯者  
 歴史に名を得し哥薩克も      今は昔の夢なるぞ  
 旭に解くる雪氷      消てぞ失せむ露西亞兵



いざ起て奮へ我男兒 駒さへ勇む春立てり  
仁義の師に敵はなし 愉快極まる此戦ひ  
旅順哈爾濱踏破り 烏拉爾の山の絶頂に  
旭の御旗を翻し スラヴの舊都莫斯科の  
森の畔に追ひ籠めて 我大君の御威徳を  
普く宇内に宣揚し 世界の平和を樂まん

征露歌

海軍中佐

廣瀬武夫

一

御國に仇なす奴原を 打拂はむはわか勤め  
今度の仕打のみならず 豫々あしき露西亞坊  
打懲さんは今なるぞ

二

樺太交換その以來 無禮に無禮を重ねたる  
失敬極まる露西亞坊 日頃積りしわか恨み  
晴さん時は今なるぞ

三

いか程國は廣くとも いか程艦は多くとも  
手並の知れし露西亞坊 いろはにほへとちりちりと  
打破らむは今なるぞ

征露軍歌

横井忠直

其一

膺てや懲せやロシヤ國を ロシヤは平和の讐敵ぞ



正理公法攪き亂す  
 信なく義なく昔より  
 同州同種の諸國にも  
 暴虐非道豺狼の  
 滿洲三省併吞し  
 平和を貴ぶ我國の  
 さてこそ皇師は動くなれ

ロシヤは道誼の讐敵ぞ  
 他國を取るを國是とし  
 蛇蝎の如くぞ忌まれ居る  
 壓くを知らざる貪慾は  
 韓をも蠶食せんとせり  
 争でか之を座視すべき  
 膺てや懲せやロシヤ國を

其二

遼東還附は誰が業ぞ  
 其舌未だ乾かぬに  
 撤兵條約棚に上げ  
 暴戾倨傲の振舞は

平和に妨げありしとて  
 己は靦然之れに據る  
 我物顔に他を拒む  
 世の同情を失へり

殊に御國の同胞が  
 危急を不問に附すべきや  
 天定まれば人に勝つ  
 時は來れり今ぞ今

鮮血灑ぎて得し土地の  
 嘗膽臥薪はや十歳  
 惡運何ぞ長からん  
 膺てや懲せやロシヤ國を

其三

國大なりと言ふ勿れ  
 人口多しと言ふ勿れ  
 財源涸渴し負債殖え  
 糧食繼かず民和せず  
 金甌無缺の我國は  
 君を戴き臣民は

過半は沙漠不毛のみ  
 數十種族の烏合のみ  
 虛無黨潜かに時機を待つ  
 渠豈に久しく支へんや  
 上に萬世一系の  
 忠勇世界に比類なし  
 朝日の前の露ぞかし



日の旗押建て押進み  
膺てや懲せやロシア國を  
進軍の歌

平岡 熙

日輪照らす其ときは  
露さへ消えて根を絶やす  
ひらく蕾や花もなし  
憐れや露國の末路かな  
戦は我が儘得手勝手  
我さへ勝てば夫でよし  
國に盡すは今ぞかし  
進めや兵士猶豫なく  
大にすゝんて戦へは  
勝に極つたわが勇士  
利益は御國へ残し置  
露助や降參早くしろ  
陸にはかばねを晒すとも  
海には魚腹を満すとも  
軍人ビクトモするのじやなし  
滿洲原野を踏み附けろ  
萬の神々まもるなり  
萬八千代の後までも

歳々稱へて譽められよ  
陸軍海軍萬々歳

陸軍軍歌

加藤 義清

第一章

出征

世界の歴史に日の本の  
光を添へむ時を得て  
世界の戦史に日の本の  
武勇を示さむ時を得て  
進みにすゝむ三軍の  
士氣滿洲にあふれけり

第二章

斥候

橋なき川を渡らずば  
敵の動靜知りがたく  
道なき山を越ざらば  
敵の所在は探り得じ



哨兵線外數十里 軍に先立つ斥候兵

第三章

歩兵

彼我の歩兵の小銃の音絶間なし數時間  
山なす屍にまじりたる 吾战友は幾許ぞ  
要害堅固の砲壘を 乗取る今日の大快戦

第四章

騎兵

縦横無盡に踏みしだく 吾勇猛の騎兵隊  
乗馬に誇る哥薩克も 唯一戦に蹴散らされ  
一兩三騎の傳令使 見ても逃ゆくあはれさよ

第五章

砲兵

互に交ふる砲弾は 滿洲原野に鳴りひびき  
地の利占めても敵弾は 吾に達して發火せず  
是に反する吾砲弾 百發百中壘を抜く

第六章

工兵

偵察隊の報告に 敵の地雷火うちあばき  
材を求めて橋を架け 鐵道布設に夜を徹し  
戦闘隊に目的の 陣地をあたふる工兵隊

第七章

輜重

連戦連勝壘を抜き 數百里外に進みても



糧道絶えなば三軍の 武勇も遂に衰へむ  
糧食輸送にかけめぐる 輜重の任務嗚呼重し

第八章

衛生

十字の徽章腕に巻き 戦闘隊に従ひて  
硝烟彈雨を掻い潜り 痛手に悩む負傷者を  
たすけ勞はる愛情の 看護は至れり衛生隊

第九章

分列式

盛なるかな吾陸軍 分列式を滿洲の  
原野に舉げんはちかゝらん 盛なるかな吾陸軍  
千代田の宮にかちどきを きこえあげんは近からん

征露歌

中山幸子

第一章

いくさに進むますらをの たけきこゝろに劣らしと  
をみななからも一すちに 御國のためにつくさはや

第二章

山田のいほのをのこらも いさやてきちに向はむと  
うからやからを返りみす つくすこゝろそ勇ましき

征露歌

柳茂太郎

一

明治三十七年の 二月八日は我郷に



召集令の下りたる

出征軍の記念日よ

二

既に學びし軍人の  
われに仇なす敵國を

精神五條を服膺し  
伐ちて懲さん時なるぞ

三

進めますらを勇しく  
伐ちて懲らして日本の本

伐てよ益良雄敵國を  
名譽をあげよ益良雄よ

征露歌

戸島重巽

一

皇統一系連綿と  
いむかふ仇をいさや打て

照らし輝く日本の本に  
陸海軍のますらをよ

二

進みてうてよ諸共に  
開闢以來我國は

徳義に背く敵國を  
外侮を受けし例なし

三

進めや進め陸海軍  
武勇を示さん時なるぞ

世界の歴史に日本の  
名譽をわけん時なるぞ

旅順閉塞の歌

坂正臣

一

海ばら探る火の影に  
大膽不敵敵港を

見れば間近し艦五つ  
武装も無て衝んとや

二



天つ空より降りしか 鬼か神かと敵の軍  
沸くが如くに騒立ち 大砲小銃撃亂す

三

篠突く火雨彈霰 あぶせかけたる電の  
光に目さへ眩めくは 阿鼻の地獄の叫喚か

四

五つの艦は皆碎け 乗組む七十七勇士  
一人も今は残らじと 想ひやられて胸痛し

五

是ぞ明治の甲辰 二月二十三日の夜  
忠義に凝りし決死隊 旅順を塞ぐ大事業

六

夜も白々と明渡り 見れば港の口狭し  
名譽の戦死したりしは 梅原健三たゞ一人

七

壯烈鬼神を泣しめて 摸範を四海に示したる  
この大事業又更に 擧られしこそゆゝしけれ

八

越えて三月二十七 まだ夜深きに四つの艦  
さきの將校機關士は 新手の下士を率行く

九

前後二回の閉塞に 勇と智仁を備へたる  
廣瀬中佐がふるまひは 開闢以來たくひ無し

十



ますら武夫の鑑にと  
肉を遺して飛去りし  
軍の神よ嗚呼神よ

裸體の勇兵

千葉胤明

第一章

雪しろかりし長白山  
春吹く風に打解けて  
流るゝみづの滔々と  
音すさまじき鴨綠江

第二章

瀬踏をする者誰かある  
響き渡れる命令に  
戎衣も靴も脱ぎ棄てゝ  
本流横ざる快男兒

第三章

續きて渡る全軍の  
山も抜く可き勢に

敵は逃げゝり彼の岸を  
彼は着きけり彼の岸に

第四章

岸の岩角踏みならし  
上る折しも敵一騎  
狙ひ定めてとる銃の  
曳き金おろす一刹那

第五章

彼が銃器を奪ひ取り  
逆手にもちてうちおろす  
力餘りて碎けゝり  
銃の臺尻敵の骨

朝日艦

海軍中佐

廣瀬武夫

そも我々の乗組める  
其軍艦の名を問へば  
茜さすてふ朝日艦  
駭々のほる國運と  
八絃照らす大御稜威  
現はし出すも心地よし



見よや勇々しき其姿 豪然四海に雄視して  
 誰とて勇氣を競ふへき 健兒八百有餘人  
 君にちかへる節操は 其甲鐵にくらぶべし  
 巖をもとほす真心は 十二吋の彈丸に比し  
 などか劣りのあるへきそ つねにあふける軍艦旗  
 國にちなめる朝日艦 まもる我々護らるゝ  
 艦は名に負ふ茜さす 日本一なる朝日艦  
 世界一なる朝日艦

聞皇軍連捷之報不堪歡喜聊述鄙懷作

歌一首

坂正臣

小舟漕く露西亞の國は 國廣く人おほかれど

人なみの人は少なく 獸なすあらくあり是  
 人のもの奪ひ掠めて 身を肥すならはしなれば  
 其國の君のおやなる 彼得といひしみかとも  
 よのなかの國のことく わか爲にせむと計りて  
 はかりこと遺し置きけれ をしへ以て人の心を  
 我が方に招き靡かせ 巧なる罨をまうけて  
 争はんいとくち作り さてのちに軍出して  
 四方八方の國奪ふめり おそろしや憤るしや  
 露西亞人かゝる心に 滿洲のひろ野をおほひ  
 韓山に頸さしのへて 皇國をも呑むとしけり  
 しかれこそ遠き御世より 我國の内にいりつる  
 樺太をあさむき取りて 近き頃支邦に勝得し



遼東のみさき還させ  
あのれ早どりて築きて  
其耻をふくみ忍ひて  
大和人いまは起たんと  
陸よりは馬なめ行きて  
敵の船今日も沈めつ  
報せ來る聲きく我身  
西比里亞の方へこそ飛へ  
かくとみて胸痛ければ  
人皆のいふはまことか  
哈爾賓のみやこ陥れ  
ねちけたる心ひるかへし

十とせにも未たならねば  
ほこり顔に我を笑へれ  
此の腕を鍛ひ堅めし  
海よりは船みてつゝけ  
戦へはたゝかふ毎に  
敵の城今日も取りつと  
うれしさに心ぬけいてゝ  
ふくつけき露西亞ツアルも  
心さへ狂ひ初めきと  
あはれく一日も早く  
敵の膽挫きこらしめて  
道ならぬ望とゝめて

人なみの人となるへく

詠志士沖禎介歌

國のため身もたなしらぬ。  
かくもがごい磨きすまし。  
波さける海坂こえて、  
仇雲の千重のおくかの。  
貝加爾の蛟もどらな。  
烟ふく龍も斬らなど。  
身をひそめたねらふはしに。  
物打際かけて砕けつ。  
こゝ思へばかなしかれども。  
劔刃の其の利心の。

教へてしかな

安部 井 磐 根

益良雄の心の劔。  
かくもがごい磨きすまして。  
道さぶる仇雲わけて。  
西比利亞の鷺も手どらな。  
物らいふ草木もながな。  
其龍のい通ふ道に。  
いかなりし物にふればか。  
そこ思へばあやに悔しも。  
手もすまに磨きすましゝ。  
氷刃の其の利心は。



天地にきらめきわたたり。益良雄のうまし鏡と。  
い照りかゝやく。

勇士大橋啓吉氏をよめる歌

福田泰造

もろこしの、からとふ國の。名くはしき、鬩河の川の。  
其川の、深さしらむと。其川の、浅さしらむと。  
むら肝の、心ふりおこし。裸體にて、い涉りゆけは。  
仇どもら、おひえわなゝき。戦はむ、ときをしらに。  
あるはにけ、あるはくたりぬ。あはれく、大橋氏の。  
たくひなき、其いさををは。ひとみなの後の世までに。  
かたりつくへし。

南山攻撃

陸軍少將

中

村

覺

第一章

南山せめむとふくる夜に 勇み進めるものゝふの  
山また山をよぢのぼり 谷また谷を打越えて  
たどれる路は道ならず こゝにかしこに踏迷ひ  
覺られまじと只管に 皆息の根をころしつゝ  
進みちかづく第二軍

第二章

折しもあれや夕立の 黒雲空にふさがりて  
ひらめき渡る稲妻や はためき落つるいかちの  
音すさまじくふる雨は 車軸をながす如くなり  
天の佑とよるこびて 敵の砲壘めざしつゝ



進み寄りたる第二軍

第三章

警戒きびしき敵兵は  
目あてもわかぬ砲彈を  
我みいくさは事もなく  
岡のあなたに兵を伏せ  
明くるを待ちし第二軍

闇夜を照す光彈や  
うち放ちつゝ守れども  
山のこなたに砲をすゑ  
戦列こゝに整ひて

第四章

我砲兵は二百門  
それと火蓋を切りければ  
火花をちらすそのさまは  
この時歩兵の一隊は

時をたがへず諸共に  
敵またこれに應戦し  
電光石火もたゞならず  
金州城をうち破り

難なくこれを落したり

第五章

第四師團のつはものは  
第一師團のものゝふは  
第三師團のますら男は  
息をもつかず攻よせし  
譬へむものもなかりけり

金州灣の海手より  
南山堡壘の正面に  
大房身の側背に  
獅子奮迅のありさまは

第六章

金州灣の波間より  
敵壘目掛けて打出せば  
敵の軍艦あらはれて  
海陸一致の大激戦

わが軍艦は進みいで  
大連灣のあなたにも  
また我軍を砲撃す  
山嶽爲めに震動し



天地も崩るゝ許なり

第七章

この勢に僻易し  
さは云へ敵壘堅固にて  
右に左に機關砲  
防禦のてだて抜目なく  
敵の勇氣ぞたけくし

敵砲まもなく沈黙す  
西にひがしに鐵條網  
地雷火狼奔とりく  
必死となりて戦へる

第八章

慄悍決死の我兵は  
屍の山をふみ超えて  
流石の敵も氣をのまれ  
我が日の本の日章旗

硝煙彈雨を冒しつゝ  
縦横無盡に突撃す  
皆ちりくゝに逃落ちて  
南山高地の頂上に

夕日と共にかゝりやけり

第九章

戦ひすみし夜の空  
吹來る風はなまぐさし  
我が兵士はいくばくぞ  
花は櫻よ人は武士  
其名や代々にかをるらめ

雲間の月は影清く  
この戦に斃れたる  
大和島根に名も高き  
散べき時に散てこそ



### 大日本歌道獎勵會規則

- 第一條 本會ハ歌學ヲ獎勵シテ斯道ノ振興ヲ圖リ兼テ歌人相互ノ情誼ヲ厚ウスルヲ以テ目的トス
  - 第二條 本會ハ大日本歌道獎勵會ト稱ス
  - 第三條 本會ハ本部ヲ東京ニ支部ヲ各地方ニ置ク  
支部ハ別ニ定ムル所ノ内則ニヨリ地方會員三十名以上ヲ以テ組織シ本部ノ統轄ヲ受ク
  - 第四條 第一條ノ目的ヲ達セムガ爲左ノ事業ヲ爲ス
    - 一、毎月一回冊子「歌」ヲ發刊シ帝室ニ献納シタル後會員ニ頒布ス
- 「歌」掲載要目左ノ如シ

宮中月次御歌會御兼題、會員相互ノ歌合、競點、名評、唱歌、軍歌、長歌、今様其他内外歌ニ關スル時報

一、會員ノ親睦ヲ圖ル爲臨時大會又ハ研究會ヲ開ク

第五條 本會ノ趣旨ヲ賛成セラル、者ハ何人ト雖モ會員タルコトヲ得

第六條 本會ノ會員ハ特別名譽會員、名譽會員、特別會員、通常會員ノ四種トス

- 一 特別名譽會員ハ名譽ノ爲 皇族ヲ推戴ス
- 一 名譽會員ハ名門貴紳、斯道ノ大家及ビ二百圓以上ノ金圓又ハ物件ヲ五ケ年間以内ニ若クハ一時ニ金百五十圓以上ヲ寄附セラル、者ニシテ



本會ヨリ推舉シタル者

一、特別會員ハ毎年五圓以上ノ金圓又ハ物件ヲ十ケ年間若クハ一時ニ金五十圓以上ヲ寄附シ又特ニ本會ニ對シ裨益ヲ與ヘラル、者ニシテ本會ヨリ推舉シタル者

一、通常會員ハ毎月會費トシテ金二十五錢ヲ納メラル、者

第七條

會員ハ住所姓名位勳功級爵ヲ明記シ本會ニ申込マルベシ本會ハ申込書ヲ受理スルト共ニ會員名簿ニ登録ス但通常會員ハ別ニ入會金二十五錢ヲ添ヘラルベシ

第八條

本會員ハ三大節ヲ始メ毎月宮中ニ於テ行ハルベキ月次御歌會御兼題及本會特定ノ兼題或ハ競點歌ヲ詠ミ送附セラレベシ

第九條

會員ニシテ本會ノ名譽ヲ毀損スル行爲アル者又ハ會費ノ納付ヲ怠リシ者ハ役員會ノ議決ヲ經テ除名シ其旨冊子「歌」ニ公示スルコトアルベシ

第十條

本會ノ總裁ハ名譽ノ爲 皇族ヲ推戴ス

第十一條

本會ノ役員ハ會長一名、顧問十名、評議員若干名、幹事若干名トス

第十二條

役員會ハ重要ノ件アル毎ニ之ヲ開キ通常總會ハ毎年一回之ヲ開キ業務ノ成績ヲ報告ス



大日本歌道獎勵會役員

總裁

功大勳位 威仁親王殿下

會長

侯爵 鍋島直大

顧問 (以下イロハ順)

男爵 細川潤次郎

男爵 渡邊千秋

子爵 長岡護美

子爵 黒田清綱

子爵 藤波言忠

伯爵 佐々木高行

伯爵 土方久元

伯爵 東久世通禧

男爵 千家尊福

評議員

文學博士 萩野由之

文學博士 芳賀矢一

畠山健

馬場三郎

阪正臣

遠山英一

東儀季熙

上 眞行

植松有經

文學博士 井上哲次郎

井上頼圀

猪熊夏樹

文學博士 大槻文彦

大口鯛二

文學博士 黒川眞頼

丸山正彦

藤岡好古

文學博士 小杉楨邨

小出 榮

文學博士

上田萬年

中邨秋香

塚田菅彦

武島又次郎

賀茂百樹

神田息胤

加藤義清

鎌田正夫

香川秀五郎

尾崎宍夫

萩原嚴雄

千葉胤明



須川信行

幹事

挾間次右衛門

千葉胤明

井原豐作

大町壯

船曳文衛

雨森巖之進

跡見花蹊

佐々木信綱

木村正辭

三上參次

三輪田眞佐子

宮地嚴夫

篠田時化雄

下田歌子

芝葛正鎮

本居豐穎

物集高見

關根正直

文學博士

文學博士

文學博士

(非賣品)

明治三十七年十一月十二日印刷  
明治三十七年十一月十五日發行

編輯者兼  
發行者

井原豐作

東京市麴町區永田町二丁目三十九番地

印刷人

渡邊爲藏

東京市京橋區日吉町四番地

印刷所

民友社

東京市京橋區日吉町四番地

東京市麴町區有樂町三丁目二番地  
(神宮奉齋會本院內)

大日本歌道獎勵會

(電話本局六百九十九番)

發行所

不許  
複製



發行所

大日本煙草製煙會

(發行所本館大正八式式書)

東京市神田區本町三丁目二番地

印刷所

東京市神田區日吉町四番地

印刷人

東京市神田區日吉町四番地

不  
信

印刷所

東京市神田區本町三丁目三番地

西曆一千九百二十一年十一月二十五日發行

(本館印)



